
ハヤテのごとく！短編集～ヒロインは変わる、時のように～つながりを持たない短編集 2

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！短編集〜ヒロインは変わる、時のように〜つながりを持たない短編集2

【Nコード】

N8974D

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

ハヤテのごとく！の短編集第2弾です。今回はあまり書かない力ツプリング等をやっているかと思えます。

第00話：プロローグ

ええと、ユーリでございます。

ハヤテのごとく！短編集もこれで2作目となりました。

今回の作品では、私がいまだに書かないカップリングや友情話等をやっているかと思えます。

今回もだいたい前後編で終わる話がほとんどで、前作と同じく話のつながりは全くないです。

予定にあるのは5つか6つの話ですが、書きたいカップリング等が増えれば話も増えるかと思えます。

最初の話は桂雪路と薫京之介です。

では、前作と同じくごゆるりとお楽しみくださいませ。

第01話：桂雪路&薫京之介編／約20年の想いが叶った日

薫京之介。

白皇学院で体育教師をやっている28歳の独身。

子供の頃からガンブラにハマっており、収入の一部をガンブラ購入に当てている男である。

まあそれも、恋人がいないからなのだが。

しかし実は、幼なじみで現在同僚である桂雪路に昔から好意を抱いているのだ。

だがなかなか言い出せず、10数年の間告白できずにいたのである。

そして、今彼は・・・

なぜかその雪路と共に飲み屋にいた。

雪路

「で、ナワ は最近どうなのよ?」

京之介

「だからオレはナワ じゃねえつつうの。オレがナワ ならオマエはキバ シかよ。」

いつもの会話が続く。

雪路

「アンタこの前、橘君のメイドさんとお見合いしてたでしょ？」

京之介

「あ、ああ・・・最後はオマエが妨害したけどな。」

雪路

「アンタって、ああいうタイプが好みなの？」

京之介

「イヤ、そういうワケじゃ・・・」

雪路

「じゃあ、好きな人はいないの？」

京之介は、雪路の顔を見て思った。

今日の彼女は、いつになく真剣な顔だと。

京之介

「イ、イヤ・・・一応気になるヤツはいるんだけど・・・」

京之介は目をそらしながら言った。

雪路

「そう・・・」

京之介

「オマエはいるのか？好きな人。」

今度は京之介が雪路に聞いた。

雪路

「いるわよ。小さい頃からずっと想ってる、ある人がね……」

京之介

「え？」

京之介はキョトンとした。

雪路

「覚えてる？私とアンタがまだ高校生だった頃……」

回想……

10年前

「薰〜！オマエ高校生のクセにガンブラやってんのかよ〜！」

「くだらね〜事やってんな〜！」

京之介は、2人の男にからかわれていた。

1人の男が、京之介の机からガンブラを取り上げた。

薫京之介『当時18歳』

「あ！返せよ〜！！」

「ヘッ！こんなつまんねゝ物、こうして・・・」

男がガンブラを上には振り上げたその時、1人の少女がそれを引ったくった。

パツ！

「あ！テメエニ之宮！」

「何すんだよ！！」

ニ之宮雪路『当時18歳』

「この子は何やろうが、アンタらには関係ない事でしょ？こんな大
人気ない事しないの！」

昔の雪路は、現在のヒナギクのように正義感が強かった。

「ヘッ！幼なじみだからってかばってんじゃねえよ！」

「オマエらデキてんじゃねえのか？」

2人の男が雪路をからかうと、雪路は男達をはたいた。

バシバシ！！

「イツデエゝ！！」

雪路

「そんな事、アンタらには関係ないでしょ！？ホラ、お昼買いに行

くわよ京之介！！」

京之介

「あ、ああ・・・」

頭を抑える2人を尻目に、雪路と京之介はお昼を買いに出かけた。

雪路

「フゝ、やっぱり飲物はグレープフルーツジュースにかぎるわね。」

京之介

「なあ、雪路・・・」

雪路

「何よ？」

京之介

「何でオレの事、いつも助けてくれるんだ？」

雪路

「何でって、そりゃ・・・アンタが泣き虫だからでしょうが。アンタを守るのは、幼なじみの私の役目・・・そう私は思ってるから・・・」

京之介

「・・・」

雪路の発言に、京之介は赤面した。

やがて、ヒナギクの6歳の誕生日に雪路達の両親は8000万円の借金を彼女に押しつけて姿を消した。

雪路はコーヒーショップで必死になって働き、何とか借金を返しきった。

まあ、多少強引な手段も使ったようだが。

その後、雪路とヒナギクは桂家の養女となったのだ。

京之介

「そうだったな、そんな事もあったけな・・・」

雪路は少しビールを飲んだ。

京之介

「なあ、雪路。オレの話聞いてくれないか？」

雪路

「良いわよ。話って何？」

京之介

「オレさ、昔からオマエの事好きだったんだ。でも、オマエはオレよりもカッコイイし、人気もあったし・・・正直、オレなんか雪路と釣り合わないと思ってて・・・約20年も片想いを続けてきた

んだ。」

雪路

「・・・」

京之介

「情けねえよな、オレ・・・日比野がオレにキモイ話だって言うのも、わかる気がするよ・・・」

京之介の話が終わると、雪路は彼に顔を寄せた。

雪路

「アンタ、そんな事でずっと悩んでたワケ？確かに情けないわね。」

雪路はそう言うと、京之介の頬にキスをした。

チュッ！

京之介

「ゆ、雪路！？何を・・・」

雪路

「良い？良く聞きなさい！私はね、アンタの器用な所が好きだったのよ。でも、恥ずかしいから中々言い出せなくて・・・20過ぎてもアンタに告白できないイライラを、酒とかにぶつけて晴らしてきたけど、やっぱりもう限界だわ。」

雪路は言い終わると、頬を赤くさせながら言った。

雪路

「ずっと言えなくて、ゴメン・・・私、アンタの事が好き。アンタさえ良いなら、私と結婚してくれない？」

雪路が言い終わると、京之介は瞳が潤んだ。

京之介

「良いに決まってるじゃねえか。オレもオマエの事が好きなんだからよ・・・」

雪路

「フフ・・・これからもよろしくね、京之介。」

京之介

「こちらこそよろしく、雪路。」

それから1ヶ月後、雪路と京之介は結婚した。

式にはハヤテ達生徒が多数駆けつけ、2人を祝福してくれた。

雪路はもう、イライラを酒等にぶつける事はないだろう。

ずっと想い続けてきた、幼なじみと結ばれたのだから。

桂雪路と薫京之介。

2人の未来に、幸あれ。

第02話：生徒会3人娘編／女子高中生探偵・瀬川泉の事件簿『前編』

ここは白皇学院。

小中高一貫教育の学校で、よほどの事がない限り落第しないレベルの高い学校である。

この学校の時計塔に、桂ヒナギクら生徒会役員達が集まる生徒会室がある。

生徒会長の桂ヒナギクは成績は抜群で男女問わず人気者だが、高所恐怖症という弱点を持つため、ベランダにだけは近づく事ができない。

副会長の霞愛歌は見た目はお淑やかだが、カワイイ人を見つけるとイジメずにはいられないという極S少女であり、いつも弱点帳を持っている。

書記の春風千桜は普段はクールですましているが、ひとたびバイトの日が来れば容姿真逆のカワイらしい格好に早変わりする、弾けタツプリのメイドキャラである。

風紀委員の朝風理沙は家が神社で実は巫女さんだが、鷺之宮伊澄のように特にこれといった特殊能力はなく、いつも何を考えているかわからない謎キャラである。

副委員長の花菱美希はヒナギクに良く助けられており、どこまでもヒナギクにカッコ良さを求めたまにヒナギクを困らせる内閣総理大臣経験者の孫娘である。

委員長の瀬川泉はいつもニコニコ笑っているが、ハヤテに爆弾発言をしてしまった事から一瞬にしてMキヤラになってしまった有名電気会社の孫娘である。

そしてこの泉、現在は綾崎ハヤテとつき合っている。

その影響なのか、いつも仕事をサボっている3人組の1人であった泉もマジメに仕事をするようになってしまったのだ。

これには、美希と理沙も困ってしまった。

何しろ、3人であるからこそヒナギクにバレた時でも手分けして逃げられるのだ。

だが、泉がヒナギク側に移ってしまった今、いくら2人で逃げようと泉経由ですぐヒナギク達に居場所がバレてしまう。

そのため、理沙と美希は困っていたのである。

理沙

「なあ、泉・・・本当に逃がしてくれないのか？」

理沙は泣きそうな顔になりながら、泉に聞いた。

泉

「ダメだよ？理沙ちゃん達を逃がしたら、ヒナちゃんとハヤテ君に怒られちゃうもん！」

泉は強気で言った。

美希

「どうやら泉、ハヤ太君とつき合ってるというのは本当のようね？」

理沙

「それにハヤ太君はヒナに頭が上がらないからな。悪く言えば買収か？」

泉

「失礼な！とにかく、2人を逃がすワケにはいかないよ！あーちゃん、ちーちゃん！」

泉が叫ぶと、春風千桜と霞愛歌が現れた。

あーちゃんというのは、愛歌のニックネームである（千桜のニックネームが『ちーちゃん』であるため）。

理沙

「春風さんはともかく、霞さんはちとキツいな・・・」

美希

「ええ。弱点帳に書かれたら最後だからね。」

愛歌

「わかってるなら、おとなしくした方が良いのでは？」

美希

「ぐう・・・」

美希と理沙は、おとなしく従った。

その夕方、美希と理沙は2人で帰っていた。

理沙

「クソ、悔しいな・・・」

美希

「何とか、泉をギャフンと言わせる方法はないものかしらね・・・」

理沙

「そうだな・・・そうだ！この作戦はどうだ？」

理沙は美希に耳打ちした。

美希

「それ、良いわね！」

美希は笑顔になった。

美希と理沙は、泉を出し抜くためにある作戦を考えた。

しかしこの時、2人を監視していた人物がいた事に彼女達は気づいていなかった・・・

翌日 放課後

泉は昨日と同じく、美希と理沙に話しかけた。

泉

「美希ちゃん、理沙ちゃん！今日もまた仕事手伝ってもらっよー！」

美希

「ええ、もちろん手伝っわ。その前に、トイレに行きたいんだけど
良いかしら？」

理沙

「あ、私も。」

泉

「？別に良いよ？」

泉はアッサリ許可した。

美希

「じゃあ、トイレ行ったら戻って来るから。」

泉

「ちゃんと戻って来てよ？」

泉が言うと、2人は『うん』と返事した。

美希と理沙は教室を出ると、足早に走り出した。

美希

「アッハッハ、うまくいったわね理沙〜！」

理沙

「全くだな美希！まさかあんなに簡単にだまされるなんてな〜！」

美希と理沙は、笑いながら道を歩いている。

そう、2人は戻る気など最初からなかった。

最初からサボるつもりだったのだ。

理沙

「さて、今からどこで時間つぶす？」

美希

「そうねえ・・・」

美希と理沙は、相談をしながら歩いていた。

そのせいなのか、彼女達は後ろから来ている影に気づかなかった。

「（おい、やるぞ。）」

「（はい、兄貴。）」

2つの影は頷き合う。

そして、行動を起こした。

まず右側の男が、美希の口をハンカチで塞いだ。

ガバッ！

美希

「んぐっ！！」

理沙

「！？」

美希のうめき声に、理沙は彼女の方を向いた。

理沙

「ど、どうした美希！？」

そう叫ぶ理沙も、ほどなく口を塞がれた。

ガバッ！

理沙

「むぐっ！？」

2人は必死にもがいたが、やがて目がトロンとなっていた。

美希・理沙

「うう・・・」

美希と理沙は気を失った。

2人と襲った2人組はニヤリとすると、彼女達を近くに止めてあった車の後部座席に押し込んだ。

そしてそのまま、何事もなかったように走り出した。

その様子を、ある少女が目撃していた・・・

その後も泉は美希と理沙が戻って来るのを待っていたが、一向に2人は戻って来ない。

泉

「どうなってるの・・・？全然戻って来ないじゃない！2人共！！」

泉はいつもの笑顔ではなく、とても怒っていた。

愛歌

「やられましたね。まさか、トイレを口実に逃げられるとは・・・」

千桜

「どこの中学生ですか、あの2人は・・・」

泉を呼びに来た愛歌と千桜も、ため息をついている。

ハヤテ

「で、どうします泉さん？」

ハヤテが泉に聞いた。

泉

「そんなの決まってるよ！あーちゃん、ちーちゃん、ハヤテ君！今から4人で手分けして美希ちゃんと理沙ちゃんを・・・」

泉がそこまで言った時、急に教室のドアが開いた。

入って来た人物に、ハヤテは見覚えがあった。

ハヤテ

「あなたはシスター！」

そう、ハヤテが以前執事とらのあなでお世話になったシスター、ソニアである。

ハヤテ

「どうしたんです？白皇に来て。」

ソニア

「た、大変ですハヤテ君！水色の髪の子と黒髪の女の子が、怪しい2人組にさらわれたんです！！」

ハヤテ

「ええっ！！」

ハヤテは驚いた。

千桜

「水髪と黒髪の女の子って・・・」

愛歌

「ま、まさか・・・」

泉

「美希ちゃんと理沙ちゃん!？」

泉達も、顔が真っ青になった。

その頃、理沙は薄暗い部屋で目を覚ました。

理沙

「う・・・ここはどこだ？」

理沙は立ち上がろうとしたが、なぜか体が動かない。

仕方がないので辺りを見回すと、理沙の後ろに美希の顔が見えた。

スヤスヤと寝ている。

理沙

「おい、美希!起きろ!!」

理沙が叫ぶと、美希が目を覚ました。

美希

「ん・・・理沙？」

理沙

「良かった、気がついたか。」

美希

「理沙、私達一体どうなったの？頭はクラクラするし、体は金縛りにあつたみたいに動かないし・・・」

理沙

「それは・・・」

理沙が答えようとした時、部屋が明るくなった。

誰かが電気を点けたのだろう。

「目が覚めたようだな、お嬢ちゃん達。」

美希と理沙が声のした方を見ると、怪しげな2人組が立っていた。

ここでもうやく、美希と理沙は自分達の手足と体がロープで縛られている事に気づいた。

理沙

「金縛りみたいに動けない原因はこれだったのか・・・」

美希

「私達を誘拐してどうするつもりなの？」

美希が2人組をにらみながら言った。

「お嬢ちゃん達の親から金をいただく。」

要するに、身代金目的の誘拐だ。

美希

「あなた達、見覚えがあると思ったら、以前三千院ナギちゃんを誘拐しようとしたヤツらね？私のメモ帳に載っているわ。」

理沙

「呆れたヤツらだ。性懲りもなくまたこんな事をしようとするとはな。」

「どうしても言え。オレ達には金が必要なんだよ。」

「とにかく、しばらく黙っててもらっぞ。」

男はそう言つと、ガムテープを取り出した。

テープをビリッと切ると、理沙の口に貼った。

ペタッ。

理沙

「んっ！！」

美希

「理沙!!」

「オマエには話させる事がある。携帯の場所を教えてもらおう。」

美希

「わ、わかったわ・・・」

美希はおとなしく携帯の場所を教えた。

泉達は教室で、深刻な雰囲気になっていた。

ハヤテ

「朝風さん達が誘拐されたなんて・・・」

泉

「どうしよう、ヒナちゃん？」

ヒナギク

「落ち着いて!きっと犯人から電話がかかってくるハズよ!」

愛歌

「電話してきた時が勝負ですよ、泉さん。」

泉

「うん!」

泉が元気良く返事すると同時に、泉の携帯電話が鳴った。

ピリリ、ピリリ・・・

泉

「ヒヤア！電話？」

電話の主は、美希だった。

泉

「美希ちゃんから電話だ！」

ハヤテ

「泉さん、できるだけ会話を引き延ばしてください。」

泉

「わかった。」

泉は恐る恐る電話を押した。

泉

「もしもし？」

「オマエが瀬川泉か？」

泉

「はい、そうです。あなたが誘拐犯ですか？」

「フフフ、そうだ。」

泉

「目的は身代金ですか？」

「話が早いな。そうだ。2人を助けたければ、4500万円用意しろ。」

泉

「わかりました。それより、美希ちゃん達は無事ですか？」

「ああ、無事だ。黒髪の子は口を塞いでいるがね。」

泉

「美希ちゃんの声を聞かせてください！」

「良いだろう。」

男は美希の顔に携帯を近づけた。

美希

「い、泉・・・」

泉

「美希ちゃん、無事？」

美希

「ええ、何とか無事よ。ゴメンね、泉。仕事サボっちゃって・・・」

泉

「そんな事今はどうでも良いよ！」

泉は強気で言った。

「お嬢ちゃん、君が身代金を持って来い。」

泉

「え？」

泉はキョトンとした。

「君が持つて来るんだ。そうすれば、2人は解放しよう。」

泉はしばらく考え込んだが、ほどなく答えた。

泉

「わかりました。私、行きます。」

ヒナギク・千桜・愛歌・ハヤテ・ソニア
「な！？」

泉の返事を聞いたハヤテ達は、驚いた。

美希

「ダ、ダメよ泉！これはあなたを誘い寄せる罠よ！来ちゃダメエ！
！」

「うるさい！」

男は叫ぶ美希の口を手で塞いだ。

美希

「うっっ!!」

泉

「美希ちゃん!？」

「持って行く場所は後で言う。良いか、警察には知らせるなよ!」

男はそう言つと、電話を切った。

泉

「美希ちゃん!!」

「ったく、うるさいお嬢ちゃんだ。」

男はそう言つと、美希の口にもガムテープを貼った。

ペタッ!

美希

「んっ!!」

電話が切れると、泉達は再び深刻な顔になった。

ヒナギク

「犯人は、泉を名指しで指名してきた・・・」

愛歌

「泉さんがソニーの孫娘だと知ってるって事ですね・・・」

千桜

「泉さん、どうするんです？これは罠かもしれません。」

泉

「たとえ罠だとしても、私が行かなきゃ美希ちゃん達は助けられない！行くしかないよ！！」

泉の瞳は真剣だ。

ハヤテ

「そうですね・・・泉さん、くれぐれも気をつけてくださいね。」

ハヤテは泉の手を握った。

泉

「大丈夫だよハヤテ君。心配しないで」

泉はそう言つと、真剣な顔つきになった。

泉

「待ってて！美希ちゃん、理沙ちゃん！私が必ず助けてあげるからね！！」

泉は美希と理沙の救出を強く決意した。

第03話：生徒会3人娘編／女子高生探偵・瀬川泉の事件簿『後編』

翌日、ハヤテ達は瀬川邸に集まっていた。

要求された身代金4500万円も、トランクに詰めてある。

泉

「それじゃあ、今から行つて来るね。」

ヒナギク

「泉、くれぐれもムチャはしないでね？」

千桜

「必ず理沙さん達を助けてくださいね。」

愛歌

「任せましたよ。」

ヒナギク・千桜・愛歌が口々に言う。

泉

「大丈夫だよ、心配しないで。」

泉は笑顔で言った。

ハヤテ

「泉さん。」

泉

「なあに？ハヤテ君。」

ハヤテ

「虎鉄さんが、これを持って行けと言っていました。」

ハヤテは泉に細長い袋を渡した。

泉

「（これは、確か瀬川家に代々伝わる・・・）ありがとハヤテ君。とても心強いよ。」

そう言うと、泉は出かけて行った。

パタン！

千桜

「行きましたね。」

愛歌

「大丈夫でしょうか・・・」

ハヤテ

「大丈夫ですよ。ソニアさんが泉さんの後を追ってくださいから。」

ソニア

「後を追うって、どうやってですか？」

ハヤテ

「泉さんの首の後ろに発信機をつけておいたんです。本人にも了承を得てますし、これは泉さんの身が危なくなつた時の保険ですから。」

」

ソニア

「そうですか。わかりました、では今から行って来ます。」

ハヤテ

「お気をつけて。」

ソニアは頷くと、出かけて行った。

泉は今、練馬区内を走っていた。
タタタ・・・

泉

「早く美希ちゃん達を助けなきゃ・・・待てよ？私どこに行けば良いんだっけ？」

泉が戸惑っていると、携帯が鳴った。

ピリリ、ピリリ！

泉

「はい、もしもし？」

「瀬川泉か？オレだ、誘拐犯だ。」

誘拐犯からの電話である。

「行き先を言い忘れていた。南練馬区の廃墟になった倉庫に身代金を持って来い。」

泉

「わかりました。」

「ところで、サツには知らせてないだろうな？」

泉

「大丈夫です、誰にも知らせてません。」

「それで良い。速く来いよ。」

そう言うと、男は電話を切った。

ピッ！

泉

「待っててね！美希ちゃん、理沙ちゃん！！」

泉はそう言つと、速度を上げた。

ドギヤ！！

その頃・・・

南練馬区 廃墟倉庫

美希と理沙は、廃墟となった倉庫の中に監禁されていた。

2人は体を背中合わせにされ、ロープでグルグル巻きに縛られている。

美希・理沙

「んゝ、んゝ・・・んゝ、んゝ・・・」

2人がもがいていると、向こうの部屋にいた2人組が戻って来た。

ガチャ！

美希・理沙

「！」

「お嬢ちゃん達、おとなしくしてたか？」

美希・理沙

「ん、んんん・・・」

美希と理沙は小さく頷く。

「どれ、少し話せるようにしてやるか。」

そう言うと、サングラスをかけた方の男が美希と理沙に近寄り、 2

人の口に貼ってあるガムテープをはがした。

ピリリ！

美希・理沙

「イ、イタタ・・・」

口が自由になった美希と理沙は、2人組を睨みつけた。

理沙

「1つ聞いて良いか？」

美希

「どうしてまた誘拐なんてくだらない事考えたの？」

「そんなの簡単だ。ですよねアニキ？」

「ああ、オレ達は楽しんで儲けるのが好きなんだよ。」

美希

「2度も失敗してまだ懲りてないなんて・・・」

理沙

「成長のないヤツらだな・・・」

「何とでも言いな。弟、コイツらの口を塞げ。」

「わかりました、アニキ。」

サングラスの男はガムテープをビツと切ると、美希と理沙に近づい

て来た。

美希・理沙

「ちよっ、ちよっと待つ・・・んっ!!」

『待つて!!』と言おうとした美希と理沙だが、口にガムテープを貼られてしまった。

美希・理沙

「んっ、んっ!!」

「全く、口うるさいお嬢ちゃん達だな。」

「ですね、アニキ。でも今回は仲間がいますからね。」

「そうだな。瀬川泉が手に入るのも時間の問題だ・・・」

2人組は高笑いする。

理沙

「ん、んんんうっ・・・（い、泉いっ・・・）」

美希

「ん、んんんんうっ・・・（た、助けてえっ・・・）」

美希と理沙は、俯いていた。

同じ頃、泉は南練馬区倉庫にたどり着いた。

泉

「やっと着いた・・・ここに美希ちゃんと理沙ちゃんが・・・」

泉はトランクを持つ手を強く握った。

ギュッ！！

泉

「今行くよ、美希ちゃん理沙ちゃん！！」

泉は決心し、扉を叩いた。

コンコン！

泉

「瀬川泉です！持ってきました！！」

泉が叫ぶと、扉が静かに開いた。

ギギギギギ・・・

泉は中に入る。

「持って来たか、瀬川泉。」

泉

「はい。美希ちゃんと理沙ちゃんはどこですか？」

「あそこだ。」

ニット帽の男は向こうの方を指差した。

泉

「美希ちゃん！理沙ちゃん！！」

泉が叫ぶと、美希と理沙は彼女の方を見た。

美希・理沙

「ん、んんう・・・（い、泉い・・・）」

泉

「身代金は持って来ました。美希ちゃんと理沙ちゃんを解放してください！！」

泉は叫んだが、2人組は突然笑い出した。

「ハハハハハハハハハ！！」

泉

「え？」

泉はキョトンとする。

「悪いが、そういうワケにはいかねえんだ。」

2人組がそう言うと、扉が開いて数人の男達が入って来た。

泉

「な、何！？この人達は！？」

「オレ達が脱獄する時協力して一緒に脱走した面々さ。」

泉

「ど、どういう事！？」

泉がそう言つと、どこからか声が聞こえてきた。

「やっぱりそういう事だったんですね・・・」

「だ、誰だ！？」

2人組が声のした方を見ると、上の階にソニアが立っていた。

泉

「ソニアちゃん！！」

ソニアは上の階から飛び降り、泉の側に着地する。

トン！

ソニア

「泉さん、これはワナですよ。あなたを誘き出すためのね。」

泉

「ワナ？」

ソニア

「彼らは美希さんと理沙さんをオトリにして、泉さんをも捕らえる気だったんです。ソーの孫娘であるあなたを人質にするためにね。」

泉

「私を・・・」

「フツ、そこまでわかってるんなら尚更帰すワケにはいかなえな。」

「オマエら、女2人を引つ捕らえろ!!」

2人組の声で、男達が泉とソニアに近寄り始めた。

ジリジリ・・・

ソニア

「泉さんは私の影に隠れて!!絶対に私から離れないでください!!」

泉

「う、うん・・・」

泉はソニアの影に隠れる。

ソニアは服からトンファーを2つ取り出した。

ジャキツ!!

ソニア

「あなた達の相手は私です!!かかって来なさい!!」

「ナメんなこのガキイ!!」

男達はソニアに突っ込んで来た。

ダッ!

ソニア

「やあっ!!」

ソニアは泉を影に隠しながら、トンファーで男達を強打した。

ドガァ!!

ズガン!!

「クソオ、この女強いぞ!!」

ソニア

「当たり前です。私はシスターなんですから。」

ソニアはトンファーを構え、男達を威嚇している。

だが、彼女は背後から近づく男に気づかなかった。

そして、ソニアの影に隠れていた泉が突然うずくまった。

泉

「う・・・」

ソニア

「どうしたんですか泉さん!？」

泉

「ちょっと両手に切り傷が・・・」

ソニア

「クッ!後ろに仲間がいた!？」

「ククク・・・前や横ばかり守っていてもダメって事さ。」

ソニアは泉を片手でかばいながら、回りを見渡し始めた。

「シスターといっても所詮小娘だ。1人だけでその娘を守りきるの
は不可能って事なんだよ。」

ソニア

「クッ・・・」

ソニアは泉をかばいながら男達の相手をしていたが、少しずつ彼女は疲れ始めた。

ソニア

「ハアハア・・・」

泉

「だ、大丈夫ソニアちゃん!？」

ソニア

「え、ええ・・・まだ、大丈夫です・・・」

ソニアはそう言うが、彼女の足がふらつき始めた。

そして、遂にソニアは倒れ込んでしまった。

ドサッ！

泉

「ソ、ソニアちゃん！！」

ソニア

「うつ・・・さっき足を少し切りつけられたみたいです・・・」

泉

「ソニアちゃん、大丈夫・・・」

泉はソニアを起こそうとしたが、サングラスの男に鉄の棒で殴り飛ばされた。

ドカツ！！

泉

「キャア！！」

泉は倉庫の壁に叩きつけられた。

泉

「うつ・・・」

泉は気絶した。

美希・理沙

「んんんっ!!（泉っ!!）」

ソニア

「泉さん!!」

男達に押さえつけられたソニアが、必死に叫んだ。

「オマエ達、このシスター娘を縛り上げろ!」

ニット帽の男が叫ぶと、男達が縄でソニアを縛り始めた。

ソニア

「う、ぐう・・・」

ソニアは男達によって手足を縄で縛り上げられた。

サングラスの男は泉に近づいて行く。

ソニア

「い、泉さん!起きてください!!」

ソニアが叫んだ。

「うるせえ!!」

男達の1人がもかくソニアの口にガムテープを貼った。

ソニア

「ん〜ん〜!!」

サングラスの男とニット帽の男が泉に近づき、縄とガムテープを取り出した。

「これで、瀬川泉は頂いたも同然だ・・・」

2人組は、勝ち誇った顔をしている。

そして泉の手を縛ろうとした、その時だった。

彼女の背中から、モノスゴいオーラが発動したのは。

次の瞬間、泉から放たれたオーラは2人組を吹っ飛ばした。

パン!!

「グオア!!」

2人組は壁に叩きつけられる。

「何なんだ、今のオーラは!？」

「フン、所詮見かけ倒しだ!」

「そうだ、数でかかれば怖くねえ!」

「やっちまえーっ!!」

ソニアを押さえつけていた男達が、泉の方へと走り出した。

ダッ！

それと同時に、泉もゆっくりと立ち上がる。

スウウウウ・・・

ソニア・理沙

「！！（こ、これは・・・！？）」

シスターであるソニアや巫女である理沙にはわかる。

泉の体から、ただならぬオーラが感じられる事を。

泉は背中に背負っている袋から何かを取り出した。

スラッ！

ソニア

「（ま、まさかあれは・・・）」

それは木刀だった。

そして、泉はそれを構え念を込め始める。

コオオオオオ・・・

泉

「ハアアアアッ・・・」

男達が泉に飛びかかった、その時である。

泉は木刀を振り、男達を一気に吹っ飛ばした。

バシィ！！

「グアッ！！」

「ガハア！！」

ソニア・理沙・美希

「！！！」

男達が次々と地面に落ちる。

それと同時に、2人組が目を覚ました。

「ク・・・ア、アニキ！仲間が全滅してます！！」

「何だとおおおお！！？」

泉

「安心して、峰打ちだから。」

泉は冷ややかに言う。

「チクシヨーツ！！」

2人組もナイフと拳銃を取り出し泉に襲いかかる。

泉

「私の友達をキズつけようとした事、後悔させてあげる！瀬川流剣術、潮騒の波動斬り！！」

泉は木刀を一振りし、ナイフと拳銃を叩き斬った。

ザンツ！！

「えっ！？」

「ウソ・・・」

2人組が持っていた拳銃とナイフは、真っ2つになった。

泉は慌てる2人に木刀を突きつける。

ジャキツ！！

「ヒ、ヒイツ！？」

泉

「自首・・・してくれるかな？」

「は・・・はい・・・」

2人組はヘタヘタと地面にへたり込んだ。

その後泉が電話で呼んだ警察が駆けつけ、2人組と仲間達は連行されて行った。

泉達4人は、瀬川邸に帰って来た。

ハヤテ達が4人を出迎える。

ヒナギク

「泉！」

千桜

「理沙さん、美希さん！」

愛歌

「無事だったんですね！」

ヒナギク・千桜・愛歌が泉・美希・理沙を囲んだ。

ソニア

「泉さんのおかげなんですよ。彼女の持つ木刀がなかったら、私達も危うく捕まるところでしたから。」

ハヤテ

「そうだったんですか。」

ソニア

「ところで、泉さん？その木刀ってやっぱり・・・」

泉

「うん、ヒナちゃんが持つてる正宗と対をなす木刀・村正っていうんだよ。瀬川家に代々伝わる家宝なの。」

ヒナギク

「それはスゴいわね。1度手合わせしてみたいわ。」

泉

「うーん、また今度ね。」

ハヤテ達は皆、微笑んでいた。

翌日 白皇学院

理沙と美希は、相変わらず生徒会の仕事をサボろうとしていた。

理沙

「よし、誰もいないぞ美希！」

美希

「今の内に逃げましょう！」

そう言って走り出そうとする2人。

だが・・・

泉

「どこへ行くのかなあ・・・美希ちゃん？理沙ちゃん？」

いきなり2人の後ろに泉が現れた。

右手には木刀・村正を持っている。

理沙

「うわああああ！！」

美希

「泉iiiiiiii!?!」

千桜

「私達もいますよ。」

美希と理沙を、ハヤテ達を取り囲んでいた。

ソニアもいる。

理沙

「な、何でソニアさんがここに!?!」

ソニア

「昨日づけで白皇学院に転校して来たんですよ」

美希

「そ、そうなの・・・」

愛歌

「それよりも、この状況は多勢に無勢ですわね?」

美希

「うう・・・」

理沙

「お、お願いだ泉！今日だけは見逃してくれ！！」

泉

「ダメだよ　また一昨日みたいに危ない目に遭いたくないでしょ？」

理沙・美希

「そ、それはそうだけど・・・」

泉

「じゃ、決まりだね。」

愛歌

「諦めた方がよろしいですわよ、お2人さん」

理沙・美希

「そ、そんなあゝ！！」

ハヤテ

「じゃあ、生徒会室に行きましょうか。朝風さん、花菱さん？」

ソニア

「これも神のお導き・・・」

美希・理沙

「イヤだああああ!!」

美希と理沙は、哀れにも泉達に引きずられて行った。

その後ヒナギクは泉に木刀での勝負を挑んだが、1度も彼女に勝つ事ができなかったという・・・

生徒会にはそれから、会計としてソニアが入り前より賑やかになりました

生徒会3人娘編・完

第04話：霞愛歌編〜副会長と執事の恋物語『前編』（前書き）

このお話は、『ハヤテのごとく短編集』ヒロインは変わる、時のように〜つながりを持たない短編集』に収録されている『霞愛歌編〜臨時生徒会長と副会長さん』の続編に当たる小説です。

愛歌の性格がかなりちがうと思いますが、楽しんでくれたら幸いです。

後、少し注意事項があります。

この小説において、原作にある設定は一切ございません。

つまり、『ハヤテがアテネの事をまだ引きずっている』という設定がないという事です。

以前投稿した短編集小説への評価において、ハヤテが原作で『女の子とつき合う甲斐性がない』と言っていた事を前提とし、『前の彼女である天王州アテネの事をまだ引きずっている』事を理由に論理的に考えて制作しろという評価が来たので、その方への返事と注意も兼ねてこのような事を書かせていただきました。

そのような評価をする方には、今後読んでもらう必要はありません。この注意事項を了承していただける方のみ、本編へとお進みください。

第04話：霞愛歌嬢の副会長と執事の恋物語『前編』

「・・・何？霞愛歌嬢の拉致に失敗しただと？」

「はい・・・実行した男が後1歩のところで逮捕されてしまいました・・・」

「フン、阻止したヤツは例の少年か？」

「はい、三千院家の執事です。」

「そうか。まあ良い。標的の家は突き止めてあるのだろうか？」

「はい。もう既に突き止めております。」

「良いか、あの男に伝えよ。今度こそ霞愛歌嬢を拉致するのだ、と。我ら組織のためにな。」

「ハッ。」

そう言うと、男は歩いて行った。

「フフフ、三千院帝め・・・今に見ておれ・・・目にもの見せてくれるわ・・・」

首謀者らしき老人は、不敵に笑っていた・・・

数日の休みを経て、霞愛歌は再び白皇へ登校して来た。

ただ、今までと少しちがうのは・・・

愛歌

「千桜さんゴメンナサイね、側についてもらって。」

千桜

「いえ、私も愛歌さんの事が心配ですから。」

そう、春風千桜が愛歌のボディガードをしている事である。

なぜ千桜が愛歌のボディガードをしているかという・・・

実は愛歌、1週間前に誘拐されかけたのだ。

犯人はハヤテの活躍により逮捕されたが、またいつ愛歌が狙われるかわからない。

そのため、生徒会のメンバーの1人が愛歌のボディガードをする事になったのである。

ちなみに千桜が選ばれたのは、愛歌の強い希望があったからだ。

千桜

「愛歌さん、安心してください。私や会長達が全力であなたをお守りしますから。」

愛歌

「ウフフ、頼もしいですね。」

愛歌は微笑んだ。

千桜

「あつ、ハヤテ君が。」

愛歌

「えっ!？」

千桜の声に、愛歌は辺りを見回した。

確かに愛歌の目線の先にハヤテの姿が見えた。

ナギは今日もないようだ。

ハヤテ

「あ、おはようございます愛歌さん。千桜さんも。」

愛歌

「お、おはようございますハヤテ君・・・」

愛歌は珍しくオロオロしている。

千桜

「おはようございます、ハヤテ君。」

ハヤテ

「愛歌さん、具合の方はいかがですか?」

愛歌

「え、ええ・・・だいぶ良くなりましたわ・・・」

ハヤテ

「それは良かったです」

愛歌

「あう・・・」

ハヤテの笑顔に、愛歌は赤面した。

千桜

「（フーン・・・もしかして愛歌さんは・・・）」

千桜はニヤニヤしながら、何かを考えていた。

授業が終わり、昼休みになった。

ハヤテ

「フウ・・・お昼の準備でもしましょう・・・」

ハヤテは教科書を片づけている。

千桜

「ハヤテく〜ん。」

千桜がハヤテの席に近づいて来た。

ハヤテ

「あ、千桜さん。」

千桜

「ハヤテ君、今日も三千院さんいないんでしょう？」

ハヤテ

「ええ、まあ。」

千桜

「じゃあ、私達生徒会役員とお昼と一緒にしませんか？」

ハヤテ

「ええ、かまいませんよ？」

ハヤテは千桜の提案に応じる。

愛歌

「（ハ、ハヤテ君が私達と一緒にお昼を・・・？）」

愛歌はドキドキしていた。

ハヤテ達は、食堂で昼食を取っていた。

愛歌はさりげなく、ハヤテの隣の席に座っている。

もちろん、周りからの視線がキツいのは言うまでもない。

ハヤテ

「久しぶりです、大勢で食事するのは。」

泉

「そうなんだ？」

理沙

「ハヤ太君は幼い頃、同級生達と食事した事はないのか？」

ハヤテ

「ええ・・・両親があんなでしたから、一緒に食べる同級生なんていませんでしたよ・・・」

ヒナギク・泉・美希・理沙・千桜・愛歌
「・・・」

ハヤテとヒナギク達の間には沈黙が流れる。

理沙

「（マズイ・・・何か不穏な空気になってる・・・）」

ヒナギク

「（理沙がハヤテ君の気に触るような事言っただけじゃない！！！）」

泉

「（誰か話題を変えてくれないかな・・・？）」

ヒナギク達の顔に冷や汗が流れる。

美希

「そ、そういえばハヤ太君、昨日のテレビを見た？」

ハヤテ

「すいません、あいにく勉強で忙しかったもので。何か気になるニュースでもあったんですか？」

美希

「こないだ愛歌さんを誘拐しようとしてあなたに倒され、逮捕された男がいたでしょ？」

ハヤテ

「ええ。ものの数秒で倒したので名前までは知りませんが・・・その男が何か？」

美希

「驚かないで聞いてね。その男、何と脱獄したらしいのよ!..」

ハヤテ

「な、何ですって!..？」

美希

「これがそのニュースよ。録画したのをビデオカメラで撮ったの。」

美希はビデオカメラを起動した。

ハヤテ達はビデオカメラをのぞき込む。

『先日夕方、白皇学院生徒である霞愛歌さんを誘拐しようとして逮捕された男・鵜飼秀教ウカイヒデノリ容疑者が、一昨日の深夜に刑務所から脱獄しました。調べによりますと鵜飼容疑者は脱獄が難しい独房に収容されており、警察では何者かの手引きもしくは関与があったものと見て、捜査を進めています・・・』

ヒナギク

「何て事なの、まさか脱獄したなんて・・・」

ヒナギクが紅茶をすすりながら言う。

愛歌

「私、怖いですわ・・・また狙われたりしたらどうしましょう・・・」

「

愛歌は少し震えている。

ハヤテ

「大丈夫ですよ愛歌さん！ボクやヒナギクさん達が必ずお守りしますから。」

愛歌

「え、ええ・・・」

愛歌は少し頬を染める。

千桜

「フッフ・・・」

千桜はそれを見てさらにニヤニヤしていた。

ヒナギク・泉・美希・理沙

「？」

ヒナギク達には、千桜がニヤついている意味がわからなかった。

授業も全て終わり、放課後になる。

ハヤテ達6人は、愛歌をガードしながら下校していた。

やがて、1回目の十字路に差し掛かる。

美希

「じゃあ、私達こっちだから。」

泉

「ハヤ太君、アーちゃん、チーちゃん、ヒナちゃん！また今度ねー！」

泉・美希・理沙の3人がハヤテ達と別れた。

ハヤテ達はまたしばらく歩く。

すると、2回目の十字路に差し掛かった。

ヒナギク

「じゃあ、私こっちだから。また今度学校でね。」

そう言うと、ヒナギクは帰って行った。

ハヤテ

「さて、後は愛歌さんを霞邸に送り届けるだけですな。」

愛歌

「2人共、よろしく願いしますわ。」

千桜

「では、行きましょうか。」

その後、ハヤテと千桜は愛歌を無事霞邸に送り届けた。

ハヤテ

「では、愛歌さんまた今度。」

千桜

「さようなら。」

愛歌

「ええ、送ってくれてありがとうございました。」

帰って行くハヤテと千桜を、愛歌は手を振って見送る。

ハヤテと千桜が見えなくなると、愛歌は家の中に入った。

愛歌

「今日はハヤテ君に送ってもらえて助かりましたわ・・・あ、あら？どうして私、ハヤテ君の事考えてるんでしょう・・・？」

愛歌は赤面すると、しばらくの間考え込んでいた。

翌日

三千院邸

マリア

「ハヤテ君、また紅茶の葉が切れたので買ってきてください。」

ハヤテ

「わかりました、マリアさん。」

マリア

「後ハヤテ君、少しお小遣いを渡しますので何か好きな物でも買ってください。」

ハヤテ

「あ、はい・・・って、え？」

ハヤテは渡されたお札数を見て、少し驚いた。

なぜならその額は、30000円もあったからだ。

ハヤテ

「マリアさん！お小遣いが30000円って高すぎじゃないですか！？」

マリア

「そうでもありませんよ？ナギもお小遣い50000円くらいもらってますし、私も40000円はもらいますよ。」

ハヤテ

「ああ、そうなんですか・・・」

ハヤテは改めて、三千院家のスゴさを思い出した。

ハヤテ

「では、買い物に行つて来ます。」

ハヤテは手提げ袋を掴むと、買い物に出かけた。

ハヤテ

「あれ？愛歌さん？」

玄関を出たハヤテの前に、愛歌が立っていた。

愛歌

「こんにちは、ハヤテ君。」

愛歌はお辞儀する。

愛歌は霞家のSPの車で来ていた。

ハヤテ

「愛歌さん、どうしたんですか？」

愛歌

「ちよつとヒマだったので、三千院家に遊びに・・・ハヤテ君は何をしに出るんです？」

ハヤテ

「ちよつと買い物にね・・・」

愛歌

「そうですか・・・あ！私も買い物につき合って良いですか？」

ハヤテ

「別に良いですよ？」

愛歌

「じゃあ、車で一緒に行きましょう。」

ハヤテは愛歌と一緒に、車に乗り込んだ。

車は目的地に向かって走り出した。

某店

ハヤテはいつも行くお店で、紅茶の葉を買った。

ハヤテ

「買えました、愛歌さん。」

愛歌

「これでハヤテ君の用事は済みましたね。あ、そうだ。私の買い物につき合ってくださいませんか？」

ハヤテ

「買い物にですか？」

愛歌

「はい。近くのデパートに。」

ハヤテ

「ええ、良いですよ。」

愛歌

「じゃあ、行きましょう。」

ハヤテと愛歌は、デパートに向かった。

ハヤテと愛歌は、デパートにやって来た。

ハヤテ

「こないだマリアさんとデパートに来た事があるんですが、最近流行の服が売られているみたいですよ。」

愛歌

「そうなんですか。あ！」

ハヤテ

「どうしましたか、愛歌さん？」

ハヤテが愛歌に話しかけた。

愛歌は水着売り場に目をやっている。

ハヤテ

「水着ですか？　そういえば新作水着が発売したとか瀬川さん達が言っていましたねえ・・・」

愛歌

「ええ、そろそろ新しい水着を買おうかと思っていたのですが・・・私、最近の流行とか少し疎いので・・・」

ハヤテ

「じゃあ、ボクが聞いてきますよ。」

そう言うと、ハヤテは近くにいた女性店員に聞きに行った。

それから数分で、ハヤテは戻って来た。

ハヤテ

「聞いて来ましたよ、愛歌さん。何かカタログももらって来ちゃいました。」

愛歌

「そ、そうですか・・・」

多分ハヤテは女性客だと間違えられたんだろう・・・

愛歌はそう思いながら、ハヤテに聞いた。

愛歌

「それで、流行りの水着というのは・・・？」

ハヤテ

「ああ、これです。」

ハヤテはカタログに記載してある印を愛歌に見せた。

愛歌

「へエ、これがそうなんですか。」

ハヤテ

「その水着も持って来てもらったので・・・愛歌さん、試着します？」

愛歌

「ほえ！？あ、はい・・・」

愛歌は赤面しながら、水着を受け取る。

そして、愛歌は試着室に向かった。

数分後、ハヤテと愛歌は3階のゲームコーナーに来ていた。

愛歌の手には、先程の水着が入った紙袋が握られている。

結局あの後購入したようだ。

愛歌

「ありがとうございます、ハヤテ君。おかげで良いのが買えました。」

ハヤテ

「いえいえ。あーあのUFOキャッチャーに良いヌイグルミがありますね。」

ハヤテは向こうの方にある機械を見た。

愛歌

「あ、ホントだ。カワイイなあ・・・」

ハヤテ

「欲しいのならボクが取りましようか？」

愛歌

「え！？あ、はい・・・」

ハヤテ

「じゃあ、やって来ますね。」

ハヤテはそう言ってUFOキャッチャーに向かうと、数秒でヌイグルミを取って来た。

ハヤテ

「はい、取って来ましたよ。」

愛歌

「あ、ありがとうございます・・・」

愛歌は頬を染めながら、ヌイグルミを受け取った。

ハヤテ

「じゃあ、そろそろ帰ります？」

愛歌

「そうですね。」

ハヤテと愛歌は、駐車場へと向かった。

ハヤテ

「じゃあ、ボクはもう帰りますね。」

愛歌

「あ、はい。今日は色々ありがとうございます……」

ハヤテ

「では、また学校で。」

ハヤテはそう言うと、疾風の如くで帰って行った。

愛歌

「ハア、どうしたんでしょう私……まだドキドキしてますわ……」

愛歌は赤面しながら、霞家の車で帰宅した。

そして、月曜日

ハヤテはいつも通り、1人で学校に来ていた。

ナギは今日も来ていない。

ハヤテ

「ハア、今日も来てくれないやお嬢様……」

ハヤテはため息をつきながら、校舎へと入った。

授業が終わり、お昼休みになる。

昼食をどうしようか考えていたハヤテに、愛歌が近づいて来た。

愛歌

「あ、あの、ハヤテ君・・・」

ハヤテ

「何ですか、愛歌さん？」

愛歌

「今日私、お弁当作って来たんですが、ハヤテ君の分も作って来たんですよ。良かったら一緒に食べませんか？」

愛歌はカバンの中のお弁当箱を取り出し、ハヤテに見せた。

ハヤテ

「ええ、良いですよ。お言葉に甘えます。」

ハヤテは快くOKした。

愛歌

「（やったあ！ハヤテ君と2人でお弁当ですわー！！）」

愛歌は内心喜んでいた。

しかしこの時彼女は気づかなかった。

前の席の方で、ニヤついている少女がいる事に・・・

ハヤテと愛歌は、人気のない森まで来ていた。

愛歌

「ハヤテ君、丁度あそこにベンチがありますよ！」

ハヤテ

「良いですね、座りましょうか。」

ハヤテと愛歌はベンチに座ると、お弁当箱を広げた。

ハヤテはお弁当箱を空けると、おかずを1つ食べた。

パクッ！

モグモグ・・・

愛歌

「ど、どうですか？」

ハヤテ

「ええ、とてもおいしいですよ。料理上手なんですネ、愛歌さん」

愛歌

「えー！！そ、そうですか・・・誉めてくれて嬉しいですわ・・・」

カァァァァ・・・

愛歌は赤面する。

それから30分ほどかかって、ハヤテと愛歌はお弁当を食べ終わった。

ハヤテ

「あゝ、よく食べました・・・それにしてもとてもおいしかったです、愛歌さんのお弁当。」

愛歌

「そ、そうですか？あんなので良ければ、また作りますけど・・・？」

ハヤテ

「では、またお願いしますね」

愛歌

「は、はい・・・」

愛歌はまた赤面する。

すると、ハヤテと愛歌の足下に黒いネコが歩いて来た。

ハヤテ

「あ、シラヌイ。」

愛歌

「え？この子ハヤテ君トコのネコなんですか？」

ハヤテ

「ええ。お屋敷で飼ってるんですよ。おいで、シラヌイ。」

ハヤテがそう言うと、シラヌイはピョンとハヤテの腕の中に入った。

愛歌

「人懐っこいですねえ。」

ハヤテ

「ヒナギクさん達が生後間もなく拾ったので、結構懐きやすいんですよ。」

愛歌

「そうですか。あ、私も抱いて良いですか……？」

ハヤテ

「良いですよ。はい。」

ハヤテは愛歌にシラヌイを手渡す。

シラヌイはすぐに愛歌の腕の中に入った。

愛歌

「あ、ああ……カワイイ……。」

愛歌は夢中になってシラヌイを撫でている。

すると、シラヌイが腕の中からズリ落ちて愛歌の制服の中に入った。

ズルッ！

スポッ！

愛歌

「キャ！」

それを見たハヤテは顔を赤くして思わず愛歌から目を背ける。

まあ情緒が小学生並みだからというのも理由の1つなのだが。

愛歌

「キャ・・・！と、取ってください、ハヤテ君！！」

ハヤテ

「と、取ってと言われましても・・・」

そう、情緒が小学生並みのハヤテにそんな事ができるハズもない。

それでも何とかしようと、愛歌に近づいた。

ハヤテ

「は、早く出て来いってシラヌイ・・・」

もちろん、シラヌイだっていたくて愛歌の服の中にいるワケではない。

落ちて慌てているのだから、シラヌイも必死に抜け出そうとしているのである。

そしてハヤテが愛歌を揺さぶった、その時だった。

シラヌイが愛歌の服から飛び出したのだ。

ポン！

その反動で、愛歌がふらつく。

愛歌

「あ・・・！！」

ハヤテ

「愛歌さん、危ない！！」

愛歌

「キャア！！」

ハヤテ

「うわぁ！！」

ハヤテと愛歌は、そのまま倒れ込んだ。

ハヤテ

「アタタ・・・大丈夫ですか愛歌さ・・・」

愛歌さんと言いかけて、ハヤテはフリーズした。

何と、ハヤテが愛歌の上に乗っていたのだ。

端から見ると、ハヤテが愛歌を押し倒しているように見える。

しかもさっきまで愛歌の服の中でシラヌイが暴れていたものだから、愛歌が汗をかいている状態なのだ。

ハヤテ・愛歌

「・・・」

ハヤテと愛歌の間にしばらく沈黙が流れる。

その沈黙を破ったのは、カメラの音だった。

パシャ！！

ハヤテ・愛歌

「!?!」

ハヤテと愛歌が振り向くと、そこにはシラヌイを抱きかかえビデオカメラを持ち、ニヤニヤしている千桜がいた。

千桜

「あらあら・・・これはとても良い写真が撮れましたねえ」

ハヤテ

「ち、千桜さん・・・」

愛歌

「まさか、さっきの光景も・・・」

千桜

「バツチリ、ビデオに撮らせてもらいましたよ」

ハヤテ・愛歌

「ええ〜!？」

千桜

「さて、これを会長達に見せたらどうなるでしょうねえ？」

愛歌

「(マ、マズイです・・・いつも千桜さんをイジメていたから・・・このままでは仕返しを受けます!!) お、お願いです千桜さん・・・それを会長達に見せる事だけはしないでください・・・」

千桜

「良いですよ?ですがその代わり条件があります」

千桜はまたニヤリとした。

愛歌

「う・・・(何かイヤな予感・・・)」

千桜

「この事をバラされたくないなら、今度の土曜日ハヤテ君と1日デートしてください」

愛歌

「(や、やつぱりっ!!!!)」

ハヤテとの光景をヒナギク達にバラさない事と引き替えに、千桜にハヤテとの1日デートを要求された愛歌。

果たして、ハヤテと愛歌の関係に進展はあるのか？

そして、愛歌を狙う謎の男達はどう動くのか・・・！！？

第05話：電愛歌編〜副会長と執事の恋物語『中編』

千桜

「この事を会長達にバラされたくないなら・・・今度の土曜日、ハヤテ君と1日デートしてください」

愛歌

「（や、やっぱりですー！！！！）」

千桜に狙い澄ましたかのような条件をつけられ、愛歌は顔が火照った。

愛歌

「で、でも千桜さん・・・私、ハヤテ君とデートするだなんて・・・せめて何か他の事で勘弁を・・・」

愛歌はしどろもどろになりながら、何とか反論しようとする。

千桜

「デートがイヤなら、会長達にこの動画を見せるだけですよ」

愛歌

「う・・・」

千桜にクギを刺された。

さらに、ハヤテがトドメとも取れる一言を言ってしまう。

ハヤテ

「この動画が公にならないのなら、それもやむを得ないと思います。それとも愛歌さん、デートの相手がボクじゃイヤなんですか・・・？」

愛歌

「はう！！」

グサツ！！

愛歌に見えない槍が突き刺さった。

こうなると、もはや彼女に反論の余地はない。

愛歌

「べ、別に私・・・デートがイヤだなんて言ってませんが・・・」

千桜

「じゃあ、決まりですね」

千桜は笑顔で言う。

ハヤテ

「じゃあ、愛歌さん。土曜日をお願いしますね」

ハヤテは愛歌に微笑む。

愛歌

「は、はいです・・・」

愛歌は赤面しながら言う。

結局、千桜の策略にハマってしまった愛歌であった。

そして、あっという間に金曜日

夕方ハヤテは白皇学院から帰って来ると、自分の部屋にいた。

ハヤテ

「明日はいよいよ愛歌さんと1日デートか・・・緊張するなあ・・・」

「

ハヤテが指立て伏せをしながらそんな事を考えていると、ハヤテの携帯電話が震えた。

ブルル、ブルル・・・

ハヤテは携帯を手に取る。

ハヤテ

「千桜さんからメール？」

千桜からメールが来た。

『ハヤテ君、明日はいよいよ愛歌さんと1日デートですね。2人には明日、私が指定した遊園地に行ってもらいます。楽しんでくださいね、ウフフ・・・』

ハヤテ

「千桜さん、何で楽しそうな文面なんだろう・・・？」

ハヤテは千桜と愛歌の関係を知らない。

同じ頃、霞邸でも愛歌の携帯に千桜からのメールが届いていた。

愛歌

「とうとう明日になってしまいましたねえ・・・ハヤテ君との１日デート・・・」

愛歌はため息をついている。

愛歌

「千桜さんめ・・・彼女にあの動画さえ撮られなければ、私をこんな目には遭わせられなかったというのに・・・」

愛歌は千桜にハヤテとの光景を動画に撮られた事を悔しく思っていた。

しかし、今さら悔しがっても仕方ない。

愛歌

「まあこうなってしまった以上しょうがないです。明日は楽しませてもらいましょう！ハ、ハヤテ君とのデートを・・・」

愛歌は真っ赤になりながら、ベッドに突っ伏した。

その夜中・・・

鵜飼秀教

「スマンな、信康。脱獄に手を貸してもらってよ。」

カラスモノフヤス
烏丸信康

「例には及びませんよ、鵜飼先輩。アンタは私の恩人なんですから。私はアンタのためなら、喜んでこの身を汚します。」

秀教

「フッフ、頼もしい事を言ってくれるな。さすがはオレの後輩だ。」

信康

「フッフ、先輩にそう言っていただけだと光栄ですよ・・・それからもう1人いたでしょう、後輩が。」

秀教

「ああ。確か鳳家吉だったな。この近くに来ているのか？」

信康

「ええ、明日1日ターゲットの監視をずっと言っていました。」

秀教

「そうか。とにかくあのお方のためにも、必ずや成功させねばならんな。」

信康

「ええ、そうですね。」

鵜飼秀教と烏丸信康は、謎の会話をしていた。

翌日、土曜日

ハヤテ

「今日は愛歌さんと1日デートかあ。何を着て行こう・・・」

ハヤテは30分考えて、結局いつもの執事服を着て行く事に決めた。

ハヤテ

「さて、マリアさんとお嬢様に説明をしに行かないと・・・」

ハヤテは少し赤面しながら、部屋を出る。

すると、外にはマリアとナギが立っていた。

マリア

「あら、ハヤテ君。」

ナギ

「おはよう、ハヤテ。」

ハヤテ

「うわぁ！マリアさん、お嬢様！！」

ナギ

「聞いたぞハヤテ。愛歌さんとデートするんだってな。」

ハヤテ

「うー！！な、なぜそれを・・・！？」

マリア

「千桜さんから昨日電話があつたんですよ。」

ハヤテ

「ち、千桜さん・・・」

ナギ

「まあ、弱みを握られているんじゃない。今日は1日休みにしてやるから、気にせず愛歌さんとのデートを楽しんで来い。」

ハヤテ

「は、はい、ありがとうございます・・・」

ナギ

「ところで、その愛歌さんについてなんだが・・・どうやら、こないだ愛歌さんを誘拐しようとした男が脱獄したらしい。」

ハヤテ

「ええ、それは知ってます。」

ナギ

「それについてマリアと2人で調べていたんだが、どうやらソイツには仲間が2人いるらしい。」

ハヤテ

「な、何ですって!？」

ナギ

「後、その3人の上に大ボスがいるらしい。」

ハヤテ

「何かの組織って事ですか？」

マリア

「そういう事だと思います。」

ナギ

「ハヤテ、気をつけてくれよ。何だかイヤな予感がするんだ・・・」

ハヤテ

「大丈夫です、お嬢様。愛歌さんは絶対守り抜いてみせますよ。」

ナギ

「フフツ、それでこそハヤテだ。」

ハヤテ

「では、行つて来ます。」

マリア

「行つてらっしゃい」

ハヤテは出かけて行つた。

一方、愛歌の方は・・・

千桜

「いよいよ今日ですね、愛歌さん」

愛歌

「え、ええ・・・」

千桜

「せっかくデートなんですから、めかし込んで行つたらどうですか？」

愛歌

「な、何言ってるんですか千桜さん！！めかし込んだりなんてしませんよ！それにこんな事、もしお母様に聞かれたら・・・」

「私がどうかしましたか？」

愛歌

「！！！」

愛歌が恐る恐る振り向くと、そこには愛歌の母親である霞静音が立

っていた。

愛歌

「お、お母様・・・おはようございます・・・」

カスミシズネ
霞静音『愛歌の母』

「はい、おはよう。ところで愛歌ちゃん？」

愛歌

「は、はい!？」

静音

「朝から嬉しそうだけど何かあったのかなあ？」

愛歌

「な、何でもないんです!何でも・・・」

愛歌はごまかそうとしたが・・・

千桜

「愛歌さん、今日三千院家の執事とデートするんですよ」

千桜にダメ出しされた。

愛歌

「ちよつ、千桜さん!？」

静音

「へえ、愛歌ちゃんもついにデートする相手が出てきたのね」
その子の名前は?」
で、

愛歌

「あ、綾崎ハヤテ君という人です・・・とても優しい男の子で・・・

」

静音

「フーン？愛歌ちゃんは綾崎君が好きなのね？」

愛歌

「そ、そんなのでは・・・」

静音

「照れなくても良いのよ」さあて、せっかくデートするんだから
愛歌ちゃんもおめかしして行かなきゃね」

そう言うと、静音は愛歌に近づいて来た。

愛歌

「あ・・・（マズイ・・・このままでは私の貞操が・・・逃げなくて
は！！！！）」

愛歌はそう思い、逃げ出そうとしたが・・・

ガシッ！

愛歌

「え！？」

右腕を千桜に掴まれた。

愛歌

「ち、千桜さん！！は、放してください！！」

千桜

「ダメ、放しません」

千桜は微笑んでいる。

愛歌

「う．．．（楽しんでる．．．この娘、絶対この状況を楽しんでる！！）」

静音

「さ、愛歌ちゃん お着替えしましょうね」

静音がニコニコと微笑む。

愛歌

「あ．．．キャツ！！！！」

霞邸に、愛歌の悲鳴が響き渡った。

某遊園地

ハヤテ

「遅いですね、愛歌さん．．．」

ハヤテはある遊園地で、愛歌が来るのを待っていた。

すると・・・

「ハヤテくん!!」

愛歌の声が聞こえてきた。

ハヤテ

「愛歌さん！待ってましたよ・・・え!？」

走って来た愛歌を見て、ハヤテは絶句する。

なぜなら愛歌は、ゴスロリメイドの格好をしていたからだ。

ハヤテ

「愛歌さん・・・その服は・・・」

愛歌

「はい・・・千桜さんと静音お母様に着せられてしまって・・・」

ハヤテ

「そ、そうなんですか・・・大変だったでしょ？」

愛歌

「ええ、大変でしたよ・・・ここに来るまで、通行人の視線釘付けでしたし・・・」

愛歌は赤面している。

千桜

「フッフ・・・」

そんな愛歌を、遠くから千桜が不敵な笑顔で監視していた。

愛歌

「恥ずかしいですよ、こんな格好・・・」

ハヤテ

「そうですか？愛歌さん似合ってますし、良いと思いますよ。」

愛歌

「ほ、本当ですか？」

ハヤテ

「ええ、とてもカワイらしいですよ」

愛歌

「は、はうううう・・・」

愛歌は頬が赤リンゴに染まる。

千桜

「チツ・・・」

そんな愛歌を見て、千桜は不機嫌になっていた。

ハヤテ

「さ、愛歌さん。行きましょう！」

愛歌

「あ、はい！」

ハヤテと愛歌は、奥へと進んで行く。

千桜

「いけない、私も追わなければ!!」

千桜は後を追って行った。

ハヤテと愛歌は、オバケ屋敷に来ていた。

ハヤテ

「雰囲気ありますね、ここ。」

愛歌

「そ、そうですね・・・」

愛歌はハヤテにしがみついている。

ハヤテ

「あれ？もしかして愛歌さん・・・」

愛歌

「え、ええ・・・私、こういうの苦手なんです・・・」

愛歌は震えている。

ハヤテ

「大丈夫ですよ、愛歌さん。ボクがあなたを守りますから」

ハヤテは微笑む。

愛歌

「は、はい・・・」

愛歌はその笑顔に赤面した。

その時、オバケが飛び出して来た。

愛歌

「きゃーッ!!」

愛歌はハヤテに抱きつく。

ハヤテ

「走りましょう、愛歌さん!!」

ギュッ!

ハヤテは愛歌の手を握ると、走り出した。

愛歌

「は、はう・・・」

愛歌は赤面しながら、ハヤテに引つ張られて行った。

ちなみに千桜はというと・・・

中間辺りで気絶していた。

しばらくして千桜が居場所を突き止めて追いついて来た時には、ハヤテと愛歌は遊園地内のレストランにいた。

千桜

「フウ、やっと追いついた・・・怖すぎですよ、ここのオバケ屋敷・・・」

千桜はハヤテと愛歌の近くにある席に座った。

ハヤテと愛歌は昼食を食べている。

ハヤテ

「おいしいですね、ここの料理。」

愛歌

「そ、そうですね・・・」

順調に食べ進めるハヤテに対し、愛歌はあまり進んでいない。

ハヤテ

「そういえば今日はデートしてるんですね、ボク達。」

愛歌

「ほえ！？そ、そういえばそうでしたね・・・」

愛歌は狼狽えている。

ハヤテ

「それじゃあ、こんな事もしないといけませんよね。」

ハヤテはスパゲッティをフォークで巻くと、愛歌に差し出した。

愛歌

「こ、これは何ですか？」

ハヤテ

「何って、デートの定番『食べさせ合いっこ』ですよ 愛歌さん、あゝん」

愛歌

「えええええゝ！！」

愛歌は絶叫した。

ハヤテ

「あゝん」

ハヤテは笑顔で言う。

愛歌はその笑顔に見惚れてしまった。

愛歌

「あ、あ〜ん……」

愛歌は観念したのか、口を開ける。

その瞬間、ハヤテが愛歌の口にスパゲッティを入れた。

ハヤテ

「えい！」

パク！

モグモグ……

ハヤテ

「どうですか、愛歌さん？」

愛歌

「お、おいしいです……」

ハヤテ

「良かったです」

ハヤテの笑顔に、愛歌はまた赤面した。

愛歌

「もう……その代わり、私も食べさせますからね！」

ハヤテ

「フフツ、良いですよ」

ハヤテと愛歌は、その後も食べさせ合いっこを続ける。

千桜は赤面しながら、ビデオカメラを回していた。

料理を満喫したハヤテと愛歌は、観覧車がある広場に来ていた。

千桜もコッソリとついて来ている。

ハヤテ

「愛歌さん、観覧車に乗りませんか？」

愛歌

「ええ、良いですよ。私はヒナギクとちがって高所恐怖症ではありませんので。」

ハヤテ

「ハハッ、ヒナギクさんが聞いたら怒りますよ?」

物陰で見ていた千桜も、『確かに・・・』という表情をしている。

ハヤテ

「じゃあ、乗る前にトイレに行って来ますので、愛歌さんはそのベンチで待っていてください。」

愛歌

「あ、はい・・・」

ハヤテは男子トイレへと走って行った。

愛歌

「フウ。さて、と・・・」

ハヤテの姿が見えなくなると、愛歌は茂みの方を向きながらこつ言った。

愛歌

「千桜さん、そこにいるでしょう？出て来なさい。」

千桜

「アハッ、やはりバレましたか。」

千桜が笑いながら出て来た。

愛歌

「全く・・・お母様の命令で私達を尾行していたでしょう・・・？」

愛歌は呆れながら言う。

千桜

「別に良いじゃないですか、見られて減るもんじゃないし。バツチり見させてもらいましたよ。ハヤテ君とのラブラブぶりを」

愛歌

「なあっ！！って事は・・・オバケ屋敷の時とレストランの時も・・・」

・？」

千桜

「バッチリ見てましたよ」

愛歌

「えええ〜！！」

千桜

「レストランの時はさすがに赤面しちゃいましたけどね」

愛歌

「ううう・・・」

愛歌は顔が真っ赤になった。

愛歌

「千桜さん・・・帰ったら覚えておきなさいよ？」

愛歌は何とか優位に立とうとする。

千桜

「そんな事言つて良いんですかね〜？」

対する千桜は余裕タップリだ。

愛歌

「ど、どういう意味です？」

千桜

「ハヤテ君とのデートはずっとビデオカメラに撮ってあるんです。私に何かした場合、ヒナギク達にこの動画を全部観せますよ」

愛歌

「ええ〜!」

千桜

「イヤなら、家に帰っても私に何かしない事ですね」

愛歌

「う、うう〜・・・」

愛歌は千桜にお仕置きする事を諦めざるを得なかった。

愛歌

「く、悔しいです・・・千桜さんに何もできない日があるなんて・・・」

千桜

「アツハツハ。じゃあ、デートの続きを楽しんで来てくださいね」

千桜は笑うと、茂みへと戻って行く。

愛歌

「うう〜、とても悔しいです・・・」

「何が悔しいんですか?」

愛歌

「はう!」

突然の声に愛歌が振り向くと、ハヤテが立っていた。

愛歌

「ハ、ハヤテ君・・・」

ハヤテ

「愛歌さん、何か悔しい事でもあったんですか？」

愛歌

「な、何でもないですよ・・・」

愛歌は狼狽えている。

ハヤテ

「そうですか。じゃあ、観覧車に乗りに行きましょう！」

愛歌

「あ、はい・・・」

ハヤテと愛歌は、観覧車乗り場へと歩いて行った。

ハヤテと愛歌は、観覧車に乗っていた。

千桜は3つ目に乗っている。

ハヤテ

「今日は1日楽しかったですね、愛歌さん。」

愛歌

「そ、そうですね・・・」

正直愛歌としては千桜に監視されていたので、あまり楽しめたとは言えないかもしれない。

ハヤテ

「また機会があれば、2人で来たいですね。」

愛歌

「わ、私なんかで良ければいつでもつき合いますよ・・・」

ハヤテ

「そうですね。今日は愛歌さんのカワイイ面をたくさん見られて良かったです」

愛歌

「・・・ハヤテ君、これは今日1日つき合ってくれたお礼です」

愛歌はハヤテの頬にキスをした。

チュッ！

ハヤテ

「愛歌さん・・・」

愛歌

「ま、また一緒に来ましょうね？」

ハヤテ

「はい、愛歌さん」

ハヤテは笑顔を見せる。

愛歌はその笑顔に頬を染めた。

しばらくして、ハヤテと愛歌は観覧車から降りた。

ハヤテ

「じゃあ、もう帰りましょうか。」

愛歌

「そうですね。」

ハヤテ

「あ、これボクのメルアドと電話番号です」

愛歌

「ど、どうも・・・」

愛歌は赤面しながらハヤテの番号とメルアドを登録した。

ハヤテと愛歌はしばらく歩く。

入口に着くと、千桜が2人を待っていた。

ハヤテ

「では、また。」

ハヤテは疾風の如くで帰って行った。

千桜

「じゃあ愛歌さん、私達も帰りましょうか？」

愛歌

「え、ええ・・・」

千桜と愛歌は、霞邸へと帰った。

しかしこの時彼女達は気づいていなかった。

2人を監視する男、鳳家吉がいた事を・・・

霞邸

愛歌は自分の部屋で、私服に着替えていた。

愛歌

「全く、千桜さんは・・・」

愛歌は愚痴を言っている。

愛歌

「普段おとなしい人ほどキレると怖いと言いますが、まさにその通りですね・・・」

愛歌はため息をついた。

ちなみに、その千桜はリビングにいた。

千桜はメイド姿で、片づけをしている。

千桜

「　　」

千桜はご機嫌のようだ。

その一時を、壊そうとしている者達がいた。

脱獄した誘拐犯の鵜飼秀教と、秀教の仲間である烏丸信康・鳳家吉の3人である。

彼らはある男の命を受け、霞愛歌を誘拐すべく霞邸の場所を突き止めたのだ。

そして今、3人は霞邸の前にいるのである。

秀教

「ここが霞邸か・・・この家、裏口とかあるのか？」

オオヤマトヨシ
鳳家吉

「ええ、昼間に私が見つけておきました。」

秀教

「フツ、さすがは組織1の隠密兵。手際の良さがちがう。」

家吉

「お誉め^{あずか}に与り光栄です。さて、行くか信康。」

信康

「ああ。秀教先輩はここで待っていてください。」

秀教

「おう。」

信康と家吉は、裏口からコッソリ霞邸へと入って行った。

家吉

「それで、ターゲットはどこにいるんだ・・・？」

信康

「どうも金持ちの家はわからん。」

家吉と信康は、霞邸内を搜索していた。

家吉

「ここか？」

家吉はリビングの扉を開ける。

そこには、メイド姿の千桜がいた。

千桜

「え？」

千桜は家吉とはち合わせする。

家吉

「オマエ、ここの家の娘か？」

家吉は千桜に近寄る。

千桜

「あ・・・あ・・・」

千桜は後退りした。

一方愛歌は自室で、ハヤテの事を考えていた。

愛歌

「今日のハヤテ君、とてもカッコ良かったですわ・・・私、やっぱり彼の事を好きになってしまったようですね・・・」

愛歌は頬を染める。

愛歌

「今度、ハヤテ君に告白しましょう・・・彼、受け入れてくれると良いですけど・・・」

愛歌が呟いた、その時だった。

千桜

「キヤアアアアア!!」

千桜の悲鳴が聞こえてきたのは。

愛歌

「千桜さん!?!」

愛歌は悲鳴のする方へと走って行く。

タタタ・・・

愛歌がリビングに着くと、千桜が冢吉に押さえつけられていた。

愛歌

「ち、千桜さん!!」

愛歌は千桜に駆け寄ろうとする。

千桜

「あ、愛歌さん!早く逃げてください!!」

千桜は必死に叫んだ。

愛歌

「え．．．！？」

愛歌が後退りした、その時．．．

ガバツ！！

愛歌

「キャツ！？」

愛歌は後ろから信康に羽交い締めになされた。

愛歌

「な、何ですかあなたは！？は、放してください！！」

信康は無言でハンカチを取り出す。

スッ！

愛歌

「放し．．．ムグツ！！」

叫ぼうとした愛歌の口を、信康がハンカチで塞いだ。

千桜

「愛歌さ．．．うぐっ！！」

『愛歌さん！！』と叫ぼうとした千桜も、家吉に口をハンカチで塞

がれた。

愛歌

「うっっ、うっっ!!」

愛歌は必死にもがく。

しかし、やがてハンカチに染み込んだ睡眠薬の効果で目がトロンと
なってきた。

愛歌

「うう……」

ガクン……

愛歌は気を失い、ガクツとなった。

千桜

「愛……歌……さ……」

愛歌の名前を言い終わる前に、千桜も気絶してしまった。

信康

「ターゲット捕獲完了。家吉、そのメイドはテーブルの脚にでも縛
りつけておけ。」

家吉

「わかった。」

信康は愛歌を背中に背負うと、玄関へと歩いて行った。

千桜をテーブルの脚にロープで縛りつけた家吉も、後を追って行く。

玄関から愛歌を連れ出した信康と家吉を、秀教が待っていた。

信康が愛歌を停めてあつた車の後部座席に押し込んでから続いて乗り込み、家吉は助手席に乗る。

秀教は運転席に乗り込むと、何事もなかったように車を発進させたのだった。

ブオオオオオ・・・

秀教ら3人組に襲われ、誘拐されてしまった愛歌。

果たして愛歌の運命はいかに！？

そして、ハヤテと愛歌の恋の行方は・・・！？

第06話：電愛歌編〜副会長と執事の恋物語『後編』

愛歌と千桜が秀教達3人組に襲われ、愛歌が誘拐されてから30分後・・・

ハヤテは霞邸にやって来ていた。

なぜ彼がここに来ているのかというと・・・

実はハヤテ、デート中に愛歌に渡すハズだったプレゼントを渡し忘れていたのだ。

そのため、ヒナギクに住所を聞いてプレゼントを渡しに来たのである。

ハヤテ

「愛歌さん、喜んでくれると良いですけど・・・」

ハヤテは階段を上り、玄関の前に立つ。

ハヤテ

「ん？ドアが少し開いてる？」

ハヤテは少し開いているドアを開け、霞邸の中に入った。

ハヤテ

「・・・？向こうの方から何か呻き声のようなものが聞こえてくる・・・」

ハヤテは呻き声のする方へと走って行った。

タタタ・・・

ハヤテ

「ここ・・・リビングルームからみたいですネ・・・」

ガチャ！

ハヤテはドアを開け、リビングへと入る。

ハヤテ

「ち、千桜さん！？」

リビングに入ったハヤテの目に写ったのは、体をテーブルの脚に縛りつけられ、口をガムテープで塞がれたメイド姿の千桜だった。

千桜

「ん、んんんん！！（ハ、ハヤテ君！！）」

千桜はジタバタともがいている。

ハヤテ

「千桜さん、大丈夫ですか？」

ハヤテは千桜に近寄ると、口のガムテープをはがした。

ピリリ！

千桜

「イ、イタタタ・・・」

ハヤテ

「何があっただんです？」

ハヤテは千桜に話しかけながら、彼女を縛りつけているロープをほどいた。

バサッ！

千桜

「ハヤテ君、ゴメンナサイ！突然侵入して来た2人組に、愛歌さんが誘拐されてしまったんです・・・！！」

千桜は泣きながら、ハヤテに抱きついた。

ハヤテ

「な、何ですって！愛歌さんがさらわれた！？」

ハヤテは千桜の足の縄もほどく。

バサッ！

ハヤテ

「一体何があったのか、話してくれますか？」

千桜

「私がリビングで片づけをしていたら、突然男が入って来て・・・悲鳴を上げた瞬間、床に押さえつけられたんです。その後リビングに入って来た愛歌さんが後ろからもう1人の男に羽交い締めになれ

て、ハンカチで口を塞がれました。私は叫ぼうとしたんですが、私を押さえつけていた男に口をハンカチで塞がれて・・・愛歌さんが気絶したすぐ後、私も気絶してしまっただけです・・・」

ハヤテ

「恐らくハンカチには睡眠薬が染み込まれていたんでしょうね。だから気絶してしまったんですよ。」

千桜

「ゴメンナサイ、ハヤテ君・・・愛歌さんを守れなくて・・・」

ハヤテ

「千桜さんのせいじゃないですよ。とにかく、犯人達からの連絡を待ちましょう。」

千桜

「ええ、そうですね・・・」

千桜は少し俯いていた。

愛歌

「ん・・・」

頭がクラクラする中、愛歌は目を覚ました。

愛歌

「うーん・・・ここはどこ・・・？」

愛歌は辺りを見回す。

愛歌

「頭が痛い・・・そうだわ、私・・・千桜さんを助けようと駆け寄ろうとしたら、後ろから口を塞がれて・・・」

愛歌は何かあったのかを思い出した。

愛歌

「体が動かない・・・手足も・・・」

愛歌は体を懸命に動かしたが、全く動かなかった。

愛歌

「うう・・・」

愛歌が俯いていると、薄暗い部屋に光が入った。

愛歌がいる部屋のドアが開けられたのだ。

ガチャ！

愛歌

「！？」

愛歌は声のした方を向く。

彼女は照らされた光で、自分の体と手足がロープで縛られているの

に気づいた。

秀教達3人が部屋に入って来る。

信康

「おっと、愛歌嬢が起きたみたいだよ。」

家吉

「そのようだな。」

秀教

「気分はどうだ？愛歌嬢。」

愛歌

「最悪ですわ・・・」

愛歌は秀教達を睨みつけた。

愛歌

「あなた方は何なんです？誰の命令で私を拉致したんですか？」

秀教

「オレ達か？オレ達はな、『ヤタガラス八咫鳥』の一員さ。」

愛歌

「や、八咫鳥！？」

愛歌は驚く。

「おお、やっと愛歌嬢を拉致できたか。」

秀教

「おつ、オレ達のボスのご登場だ。」

声のする方に秀教達が向くと、初老の男が部屋に入ってきた。

ザッ、ザッ・・・

愛歌

「あなたは・・・鳳凰院翁・・・!!」

ホウオウインオキナ

鳳凰院翁『八咫鳥のボス』

「ホホオ、さすがは三千院帝に溺愛されている霞家の娘・・・ワシの事を知っておったか。」

愛歌

「ええ、かつておじい様がやっていた大ビジネス・・・その時の協力相手の1人があなただと、おじい様から聞いてますわ。」

翁

「ご明察・・・その通りじゃ。」

愛歌

「改めて聞きます。どうして私を誘拐させたのですか？」

愛歌は翁を睨んだ。

翁

「ワシラの目的はまた後で教えてやるよ。とりあえず、お嬢さんの携帯電話の在処を教えてもらおうか。」

愛歌

「イヤです、と言ったら？」

翁

「お嬢さんのカワイイ顔や肌にキズがつくだけじゃ。」

翁はニヤつきながら言う。

愛歌

「う・・・わかりました・・・」

愛歌は俯くと、電話の在処を教えた。

所変わって、三千院邸

三千院邸では、ハヤテ達が大広間に集まっていた。

ナギ

「愛歌さんがさらわれたっていうのは本当か!？」

ハヤテ

「ええ、本当です。入って来たのは2人で、愛歌さんと千桜さんを襲った後愛歌さんだけ連れて逃げたそうです。」

ナギ

「そうか。それは困った事態になったな・・・」

4人の間に沈黙が流れる。

すると、突然ハヤテの携帯電話が鳴った。

ピリリ、ピリリ・・・

ハヤテ

「電話です!!」

千桜

「発信者は愛歌さんのようですね。」

ナギ

「恐らく愛歌さんの携帯を奪って、それでかけているんだろう。」

マリア

「ハヤテ君、なるべく会話を引き延ばすんですよ。」

ハヤテ

「はい、わかってます。」

ハヤテはそう言つと、携帯を耳に当てた。

ハヤテ

「もしもし・・・?」

翁

「三千院家の執事、綾崎ハヤテか?」

ハヤテ

「そうです。あなたは何者です？」

翁

「ワシの名は鳳凰院翁。三千院帝が昔やっていたベンチャービジネスに協力した企業グループ『八咫鳥』の総帥じゃ。」

ハヤテ

「八咫鳥の総帥？」

ナギ

「なっ・・・！？」

マリア

「何ですって！？」

ナギとマリアは、ハヤテが発した『八咫鳥』という単語に過敏に反応した。

ハヤテ

「鵜飼秀教達に霞愛歌さんを誘拐するよう命じたのは、あなたですね？」

翁

「勘が鋭いようじゃな。その通りじゃよ。」

ハヤテ

「あなたの目的は何ですか？」

翁

「最近の少年は話を進めるのが早いな。目的はズバリ金じゃ。霞愛歌嬢を助けたくば、三千院帝名義で5億7千万円を用意しろ。」

ハヤテ

「帝さん名義で?」

ナギ・マリア

「!!!」

この言葉に、ナギとマリアはまたも驚く。

翁

「そうじゃ。決して他の者名義のお札を1枚でも入れない事。良いな?」

ハヤテ

「・・・わかりました。じゃあ、愛歌さんの声を聞かせてもらえますか?」

翁

「良からう。愛歌嬢の声を聞かせてやる。ただし、簡潔にな。」

翁は携帯電話を愛歌の耳元に近づけた。

ス・・・

愛歌

「ハ、ハヤテ君・・・?」

ハヤテ

「愛歌さん！！大丈夫ですか！？」

愛歌

「え、ええ・・・今は何とか大丈夫です・・・手足と体を縛られていますけど・・・」

ハヤテ

「そうですか・・・」

翁

「身代金を運ぶ役は、後ほど連絡する。ではな。」

翁がそう言つと、電話が切れた。

ナギ

「帝のジジイ名義で金を用意しろと言ってくるとはな・・・」

ハヤテ

「お嬢様とマリアさんは、犯人の事を知っているんですか？」

マリア

「ええ・・・八咫鳥といえば、かつて帝おじい様が行っていたベンチャービジネスに協力していた企業ですわ・・・」

ナギ

「その企業の総帥が、鳳凰院翁というヤツだったんだ・・・その後八咫鳥独自の事業が失敗したんだが、ジジイは一切援助しなかったな・・・それ以降行方をくらましていたんだが、まさかこんな形で復讐を狙ってくるとは・・・」

千桜

「愛歌さん、大丈夫でしょうか・・・」

マリア

「ハヤテ君、帝おじい様には私が連絡しておきます。」

ハヤテ

「よろしく願いますね。」

ハヤテ達は、愛歌の身を心配していた。

愛歌は薄暗い地下室で、ロープを解こうと必死になっていた。

愛歌

「うゝん、うゝん!!」

愛歌はジタバタともがいている。

愛歌

「うゝん!!」

愛歌は必死にもがくが、ロープは全くほどけない。

愛歌

「うゝゝ、全然ほどけません・・・」

愛歌はうなだれる。

愛歌

「まさか、帝おじい様の関係者だったなんて・・・私、これからどうなっちゃうんでしょう・・・」

愛歌が俯いていると、地下室の扉が開いて翁達が入って来た。

ガチャ！

愛歌

「！！！」

コツコツ・・・

秀教

「気分はどうだ、愛歌嬢？」

愛歌

「最悪ですわよ・・・」

翁

「まあ、そう言っな。金さえ受け取れば無事に返してやるぞ。」

愛歌

「ところで、あなたとその3人組はおじい様に何の恨みがあるんですか？」

翁

「コイツらとワシの帝への恨みが何かと聞いたな？フッフ・・・コイツらの親はな、帝のせいで自殺したんじゃないよ。」

愛歌

「な、何ですって！？」

翁

「秀教の父である鵜飼秀定、信康の父である烏丸信輝、家吉の父である鳳家重の3人はな、ワシの組織で公務員をしていたのだ。帝との協同ビジネスが1度成功して、ワシの組織は一時期潤った。その後帝が協同ビジネスを離脱したが、ワシは自分達だけで次のビジネスも成功するだろうと安心していた・・・」

愛歌

「でも、そのビジネスが失敗したんですね？」

翁

「そうじゃ。ワシらは帝が援助してくれると信じ、頼みに行った。しかしじゃ・・・ヤツは事もあるうに、かつての協力者であったワシらを突き放したんじゃない！」

翁は拳を震わせている。

翁

「ワシは息子が闇組織の最高責任者をやっていたため、金は何とか集める事ができた。そこで、他の3人にもこの事を伝えようと八咫鳥の寮に行った。じゃが、ワシが寮に着いた時には・・・3人はそれぞれで部屋で、首を吊っていたんじゃないよ・・・」

愛歌

「そ、そんな事が・・・」

翁

「幸い秀定達3人の保険金のおかげで、彼らの息子達であるコイツらは難を逃れたが・・・それでもこの者らの三千院帝に対する恨みは日々薄れる事はなかったんじゃないや・・・」

愛歌

「それで、帝おじい様に溺愛されている1人である私を拉致し、おじい様からお金を取ろうとしたワケですね？」

翁

「そついう事じゃ。」

愛歌

「あなた達、自分勝手な人ですね・・・」

翁

「何じやと・・・？」

愛歌

「何度でも言つてあげますよ。あなた達は自分勝手です。おじい様が援助してくれなかったのは確かに良くない事かもしれませんが。ですが、それに対して逆恨みをし犯罪に走るなんてもつてのほかです！そんな事しても、何も変わりませんしあなた達は成長しません！本当に悔しいのなら、実力でお金を稼ぎおじい様を見返してみなさい！！！」

愛歌は怒鳴った。

翁

「生意気な小娘が・・・秀教、黙らせる。」

秀教

「はい。」

秀教はズボンからガムテープを取り出すと、愛歌の背後に回る。

愛歌

「逆恨みで憂さ晴らしをするだなんて、あなた達は最低・・・！」

秀教

「少し黙ってる。」

ビーツ！

愛歌

「や・・・ムウッ！！！」

ペタッ！

秀教が愛歌の口にガムテープを貼った。

愛歌

「んんっ！！！」

愛歌は叫んだが、ガムテープのせいで声にならない。

信康

「全く、うるせえ小娘だ・・・」

愛歌

「んゝ、んゝ!!」

愛歌は必死に叫んだ。

翁

「これで静かになったな。待てよ？確かあの綾崎とかいう少年、秀教を一度倒したのだったな・・・フッフ、良い事を思いついたぞ・・・」

愛歌

「んんっ!？」

翁

「オマエ達、愛歌嬢をここに置いて別室に行くぞ。少し提案を思いついた。」

秀教・信康・家吉

「わかりました。」

翁

「おとなしくしておくんじやな、愛歌嬢・・・」

翁達是不敵に笑うと、地下室から出て行く。

愛歌

「んゝ、んゝ!!」

愛歌は必死に叫んでいた。

翌日 朝

ハヤテは大広間にやって来た。

ハヤテ

「おはようございます、マリアさん。」

マリア

「おはようございます、ハヤテ君。帝おじい様からおじい様名義でお金が届きました。昨日電話してすぐに郵送してくれたそうです。」

ハヤテ

「そうですか。」

マリア

「後、おじい様から伝言です。愛歌さんを必ず助け出してくれ、との事でした。」

ハヤテ

「おじいさん・・・わかっています。愛歌さんは必ずボクが助け出します。」

マリア

「その意気です、ハヤテ君。」

そこまで言った時、ハヤテの携帯電話が鳴った。

ピリリ、ピリリ・・・

ハヤテ

「電話です！愛歌さんの携帯から！！」

マリア

「犯人からでしょうか？」

ハヤテ

「そうだと思います。」

ハヤテは電話を取る。

ハヤテ

「もしもし？」

翁

「綾崎ハヤテか？」

ハヤテ

「はい。鳳凰院翁ですね？」

翁

「そうじゃ。金の受け渡し場所を教えよう。東練馬区の勝ち虫公園じゃ。その広場に金の入ったバッグを置け。必ず1人で来いよ。」

ハヤテ

「わかってます。それより、愛歌さんは無事ですか？」

翁

「ああ、無事じゃよ。今は薬で眠っておるがな。」

ハヤテ

「そうですか。じゃあ今から行きますので。」

翁

「楽しみにしておるぞ、少年……」

電話が切れた。

ハヤテ

「マリアさん、行つて来ます。」

マリア

「気をつけてくださいね、ハヤテ君。」

ハヤテは外へと出かけて行つた。

翁

「では今から取り引き場所に行つて来る。ワシが金を受け取ったら連絡するから、あの娘を好きにして良いからの。」

翁はそう言つと、出かけて行つた。

東練馬区 勝ち虫公園

ハヤテは勝ち虫公園にやって来た。

近くに人の気配はない。

ハヤテは真っ直ぐ広場に行きバッグを置くと、茂みに隠れる。

しばらくすると、翁がやって来た。

翁は辺りを見回しバッグを取ると、何事もなかったかのように車に乗りその場を後にした。

ハヤテは茂みから出て来ると、ポケットから機械を取り出した。

ハヤテ

「よし、発信機はちゃんと反応しているな・・・」

ハヤテが翁に渡したバッグには、マリアが発信機を仕込んでおいたのである。

ハヤテ

「愛歌さん・・・今から助けに行きますから・・・」

ハヤテは発信機を頼りに、走り出した。

その頃・・・

愛歌

「んゝ、んゝ!」

愛歌は地下室で、ロープを解こうと必死にもがいていた。

愛歌

「んゝ!」

愛歌はジタバタともがくが、一向にロープは解けない。

愛歌

「うう・・・」

愛歌が俯いていると、扉が開いて秀教達が入って来た。

秀教

「おとなしくしてたか、愛歌嬢？」

愛歌は黙って頷く。

信康

「ボスが金を持って帰って来たら、この嬢ちゃんの役目は終わリなワケだが・・・」

家吉

「どうしようかね、この娘？」

愛歌

「!?!」

愛歌はビクツとなった。

愛歌

「（わ、私、もしかして殺されてしまっんでしょうか・・・）」

信康

「この嬢ちゃんには顔も見られているし、普段なら始末するところだが・・・」

愛歌

「ん、んん・・・」

愛歌は震えている。

秀教

「せっかくボスが好きにして良いって言うてくれた事だし、この娘をオレ達の好きにさせてもらおうとするか。」

愛歌

「ん、んん!？（な、何ですって!?!）」

信康

「鵜飼先輩、アンタいつから年下好きになっただんですか？」

秀教

「変な風に言つなよ。コイツが霞家の令嬢だからこそだ。ただの小娘なら、ここまで興味は湧かないさ。」

家吉

「そりゃそうですね。」

愛歌

「んゝ!!」

秀教はズボンからナイフを取り出すと、愛歌に近づいて行く。

愛歌

「ん、んゝ!!」

愛歌はジタバタともがいた。

秀教

「へへッ、覚悟しな愛歌嬢。」

秀教はナイフで、愛歌の服の左ソデを切る。

ビリッ!

愛歌

「んゝ!!」

秀教

「フッフ・・・まだまだお楽しみはこれからだ・・・」

愛歌

「んっ、んんんっ！！（イ、イヤァー！！）」

愛歌は悲鳴を上げていた。

30分ほどして、翁がアジトに帰って来た。

翁

「帰ったぞ。」

翁は地下室に真っ直ぐ向かう。

翁

「何じゃ、お楽しみ中じゃったのか。」

秀教

「ボス、おかげさまで楽しませてもらってますよ。」

秀教達は笑いながら言う。

愛歌は服やスカートの所々に切れ目が入っている状態であった。

愛歌

「ん、んんんう・・・」

愛歌は涙声になっている。

翁

「身代金は頂いたし、後は愛歌嬢を始末するだけじゃな。」

愛歌

「ん、んん．．．！！（そ、そんな．．．！！）」

愛歌はジタバタともがく。

翁

「オマエ達、殺れ。」

信康

「チエツ、せつかくの上玉娘だったのによ．．．」

秀教

「ボスの命令とあっちゃ、しょうがないな．．．」

秀教達はナイフを取り出すと、愛歌に近づいて行く。

愛歌

「ん、んん．．．（わ、私ここで死ぬの．．．？そんなのイヤです！やっとなハヤテ君を好きになったって気づけたのに．．．こんな所で終わりたくありません！！助けて、ハヤテ君．．．！！）」

愛歌は泣きそうになっている。

愛歌

「んんんっ！！！！（ハヤテ君っ！！！！）」

愛歌が必死に悲鳴を上げた、その時だった。

ハヤテ

「愛歌さ〜ん！！無事ですか〜！？」

ハヤテの声が聞こえてきたのは。

愛歌

「（ハヤテ君だわ・・・）」

翁

「綾崎ハヤテ・・・このアジトを突き止めて来たか。」

家吉

「丁度良い。とっ捕まえて愛歌嬢の前に引きずって来てやる・・・」

家吉は部屋を出て行く。

愛歌

「（ハヤテ君、危ない！！）」

愛歌はハヤテの身を案じた。

しかししばらくすると、家吉の叫び声が聞こえてきた。

家吉

「グハア！！」

信康

「お、おいどうした、家吉！？」

信康は家吉の声が聞こえた方に反応し、部屋を出る。

数分後、信康が部屋に飛ばされて来た。

信康

「グオオ!!」

ドサツ!

秀教

「な、何なんだ一体!？」

秀教が驚いていると、疾風が部屋に入ってきた。

ハヤテ

「愛歌さん!!」

愛歌

「ん、んん・・・（ハ、ハヤテ君・・・）」

翁

「フン、勇敢にもここを突き止めて来よったか。じゃが・・・」

秀教はナイフを持って愛歌に近づこうとする。

秀教

「それ以上近づくなよ、小僧・・・近づいたら、この小娘の命は・・・」

ハヤテ

「神速!!」

ドギャン!!

ガシッ!

ハヤテは秀教が愛歌に迫る前に、高速移動で彼女を救出した。

秀教

「なっ!?!」

ハヤテ

「ハアッ!!」

ハヤテは鉄拳で、秀教を殴り飛ばす。

ドゴォ!!

秀教

「うぐあ!!」

秀教は壁に激突し、気絶した。

翁

「な・・・な・・・」

ハヤテ

「後はあなただけですな。さあ、どうしますか?」

ハヤテは冷ややかに言う。

翁

「う・・・ウオオオオオ!!」

翁はナイフを取り出し、ハヤテに向かって行く。

ハヤテ

「愚かですね・・・」

ハヤテは向かって来る翁のナイフをかわし、翁の背に手刀を叩き込んだ。

ヒョイツ!

ドゴオ!!

翁

「グオオ・・・」

翁は地面に倒れ込む。

ドサツ!

ハヤテ

「愛歌さん、大丈夫ですか?」

ハヤテは愛歌の口のガムテープをはがす。

ピリリ!

愛歌

「イタタ・・・ええ、平気ですよ・・・」

ハヤテ

「今、ほどいてあげますから・・・」

ハヤテは愛歌の背後に回り、彼女の拘束を解いた。

その後ハヤテの通報を受けた警察が到着し、翁達4人は未成年者誘拐と殺人未遂の容疑で連行された。

ハヤテと愛歌は警察で簡単な事情聴取を受けた後、2人で一緒に帰った。

勝ち虫公園

ハヤテと愛歌は、勝ち虫公園に来ていた。

愛歌は秀教達に服の所々を切られたため、途中で新しい服を購入しそれに着替えている。

ハヤテ

「災難でしたね、愛歌さん。」

愛歌

「ええ・・・危ないところでした。」

ハヤテ

「でも良かったです。愛歌さんにケガがなくて。」

愛歌

「ほえ！！し、心配してくれてありがとうございます・・・。」

愛歌はたじろいでいる。

ハヤテ

「そうだ、愛歌さん。これを。」

ハヤテは紙袋を愛歌に差し出す。

愛歌

「これは？」

ハヤテ

「1日デートの時に渡し損ねた、愛歌さんへのプレゼントです。」

愛歌

「開けて良いですか？」

ハヤテ

「良いですよ。」

愛歌は紙袋を開ける。

そこには水色のカチューシャが入っていた。

愛歌

「わぁ・・・キレイなカチューシャ・・・」

ハヤテ

「愛歌さんに似合うと思って買って来たんですよ」

愛歌

「あ、ありがとうございます・・・」

愛歌は赤面しながらカチューシャをつける。

愛歌

「ど、どうでしょうか？」

ハヤテ

「とても似合ってますよ」

ハヤテは微笑む。

愛歌はその笑顔に見惚れた。

愛歌

「あ、あの、ハヤテ君・・・」

ハヤテ

「はい、何です？」

愛歌

「私、1度誘拐犯から助けられてからハヤテ君の事が気になっていました。そして、1日デートでようやく確信が持てました。私はあなたを好きになったんだと。だから、迷惑かもしれないけど聞いてください！私、霞愛歌は・・・綾崎ハヤテ君が、好きです！！」

愛歌は精一杯の思いでハヤテに告白した。

ハヤテと愛歌の間に沈黙が流れる。

ハヤテ

「・・・愛歌さん・・・」

愛歌

「は、はい！」

次の瞬間、ハヤテは愛歌を抱き締めた。

ガバツ・・・

愛歌

「ハ、ハヤテ君！？」

愛歌は赤面する。

ハヤテ

「ボクもあなたが好きです、愛歌さん。生徒会室で2人きりになったあの日から、ボクはあなたの事が気になっていましたよ。そして、1日デートでやっと自分の本心に気づけました。」

愛歌

「そ、それって・・・」

ハヤテ

「愛歌さん、ボクの彼女になっていただけますか？」

愛歌

「は、はい！喜んで・・・！！」

愛歌はハヤテに抱きつき、お互いにキスをした。

霞邸に帰ったハヤテと愛歌を待っていたのは、千桜達だった。

何と千桜、あの後ハヤテの後をつけて彼と愛歌の会話や光景をビデオに録画していたらしい。

ナギやマリア、静音達にそのビデオを見られる事になり、上映の間ハヤテと愛歌は常時赤面していた。

その後ハヤテと愛歌は、2年後めでたく結婚した。

2人はこれから、幸せな家庭を築いていく事だろう・・・

綾崎ハヤテと霞愛歌。

2人の未来に、幸あれ。

完

第07話：朝風理沙&春風千桜編〜書記と風紀委員は意外と仲良し

（前書き）

このお話は、原作『ハヤテのごとく!』13巻で千桜が咲夜のメイドとして登場した話の後という設定です。

理沙の性格が少しちがいますが、楽しんでいただけたら幸いです。

第07話：朝風理沙&春風千桜編 書記と風紀委員は意外と仲良し

やあ、ご機嫌いかがかな？

私は朝風理沙。

花も恥じらう16歳だ。

え？

前に同じような始まり方を見た気がする？

・・・細かい事は気にするな。

今日私は、ある危機に瀕しているんだ。

え、何の危機かって？

・・・貞操の危機に決まっているだろう。

私は今、目が5つあり、触手をウネウネと生やした異形の妖怪に追われているんだ。

なぜこうなったのかというと、それは約1時間ほど前にさかのぼるんだ・・・

朝風理沙はいつものように、実家である朝風神社で掃き掃除をして

いた。

理沙

「
」

理沙は楽しそうに掃き掃除をしている。

すると、神社の従者達が慌てて走って来た。

タタタ・・・

「理沙様〜！！」

理沙

「どうした？」

「例の妖怪がまた現れました！！」

理沙

「またか・・・」

理沙はため息をつく。

解説すると、理沙は神社の娘なのである。

つまりは巫女さんだ。

しかし、彼女には特殊な力などほとんどない。

せいぜいお祓いの類ができるぐらいだ。

だが、特殊能力がある者はいる。

鷲之宮の一族だ。

どうやら妖怪や魔物達は鷲之宮一族の巫女の生き血を飲むと寿命が延びるらしく、それでわざわざ除霊されに行く無謀な輩がいるワケである。

しかしどういうワケか、勘違いして朝風神社の方にやって来る妖怪や魔物もいるのだ。

そんなワケで、登校途中や下校中にたびたび襲われている理沙なのだが、伊澄達の協力もあって少しは対抗できるようになったのである。

とはいえ、さすがに今回ののは大きすぎたようだ。

「理沙様、ここは私達に任せて逃げて下さい！！」

理沙

「わ、わかった！任せる！！」

理沙は従者達にその場を任せ、逃げ出した。

理沙

「よし、ここまでくれば大丈夫かな。」

数分ほど走った理沙は、後ろを振り返る。

すると、後ろに例の妖怪が現れた。

『シャ〜!〜!』

理沙

「キヤアアアア!？」

理沙は悲鳴をあげる。

すかさず逃げ出した。

妖怪が後を追って来る。

理沙

「従者達は瞬殺だったのか・・・ヤバいなあ・・・」

理沙がそんな事を思いながら走っていると、彼女の前に鷺之宮銀華が現れた。

理沙

「あなた確か、伊澄君の大おばあ様の・・・」

鷺之宮銀華

「銀華じゃ。さあ、ここはこのオババに任せて・・・ウチの車で鷺之宮邸に逃げると良い。すぐそこに車が停めてある。」

理沙

「恩にきります!」

理沙は鷺之宮家の車に乗り込み、鷺之宮邸へと向かった。

数10分後、理沙は鷺之宮邸に着いた。

ほどなく伊澄がやって来る。

鷺之宮伊澄

「理沙さん、また妖怪が出たそうですね。」

理沙

「そうなんだ。今さっき銀華さんに任せて逃げて来たところで・・・」

「

『シャアアアアア!!』

理沙

「・・・え!?!」

理沙が振り返ると、そこには例の妖怪がいた。

理沙

「キャアアア!! な、何で・・・」

理沙は驚いている。

すると、銀華が血だらけで飛んで来た。

銀華

「い、伊澄・・・」

伊澄

「大おばあ様！！大丈夫ですか！？」

伊澄は銀華に駆け寄る。

銀華

「スマヌ、伊澄・・・今回の相手は大きすぎる・・・年寄りには荷が重かったわい・・・」

伊澄

「お母様、おおおばあ様の治療と結界を！！」

鷺之宮初穂

「わかったわ！」

初穂は理沙と銀華を結界で囲んだ。

パアアアア・・・

続いて、銀華に治療用のお札を貼る。

ペタ！

初穂

「これで2人はひとまず大丈夫ね・・・それじゃ、伊澄ちゃん！行

くわよ!!」

伊澄

「はい!!」

伊澄と初穂は攻撃用と防御用のお札を取り出すと、妖怪と戦い始めた。

『シャアアアア!!』

妖怪は触手を伸ばして来る。

シュツ!

初穂

「八葉六式・^{マンジ}卍の盾!!」

初穂はお札を卍状に合体させ、盾にした。

触手が盾にぶち当たる。

ドゴォ!!

『シャギヤアア!!?』

初穂

「伊澄ちゃんには、負けられないわ!!」

伊澄

「さすがお母様・・・私だって!八葉六式・矢札の弾丸!!」

伊澄はお札をまるで矢のように鋭く変え、複数撃ち放った。

ドドドドドドド！！

『シャギヤア・・・』

妖怪がのけぞる。

初穂

「一気に畳みかけるわよ、伊澄ちゃん！！」

伊澄

「はい、お母様！！」

伊澄と初穂は妖怪と さらに激しい攻防戦を繰り広げる。

理沙

「ビデオ持って来れば良かったかなあ。」

理沙はのんきに観戦していた。

その時である。

シュル！

理沙

「え？」

理沙の足に何かが巻きついた。

理沙

「こ、これって・・・触手!？」

そう、妖怪の触手である。

妖怪は伊澄・初穂と攻防戦を繰り広げつつも少しずつ触手で結界に穴を開け、理沙を襲って来たのだ。

シユルシユルシユル・・・

理沙

「キャ・・・ムゲ!!」

理沙は悲鳴をあげようとしたが、触手に口を塞がれる。

その間も妖怪は触手を理沙に巻きつけ、彼女をグルグル巻きに縛り上げた。

少しずつ理沙を持ち上げる。

初穂

「理沙ちゃん!？」

伊澄

「しまった!!」

伊澄と初穂が気づいた時には、理沙は妖怪の口元まで持ち上げられていた。

理沙

「んゝ、んゝ!!」

理沙は声にならない悲鳴をあげジタバタと暴れるが、全く効果がない。

『アーン』

妖怪は口を大きく開けた。

理沙を食べるためだ。

理沙

「んゝっ!!」

理沙は首を左右に振り、涙を浮かべる。

妖怪が理沙を飲み込もうとした、まさにその時・・・

初穂

「八葉六式・金縛り!!」

初穂の術が、妖怪の動きを止めた。

ピキィィィ!!

『シャ、シャギャア・・・』

妖怪は身動きできない。

初穂

「今よ、伊澄ちゃん!!」

伊澄

「はい!!八葉六式・・・轟・撃破滅却斬り!!!」

伊澄はお札を刀状にして妖怪に突っ込み、そのまま体を斬り裂いた。

ズバッ!!

『シャギヤアアアア!!』

妖怪は大爆発し、砕け散る。

伊澄

「八葉六式・レスキューカーペット!!」

伊澄は落ちる理沙をカーペット状にしたお札で受け止めた。

ポサッ!

そのままゆっくりと地面に降ろす。

トンッ!

伊澄

「大丈夫ですか、理沙さん。」

理沙

「うわあああん!伊澄君!!」

理沙は泣き出し、伊澄に抱きついた。

伊澄はそんな理沙を抱き締め、母親のように頭を撫でる。

しばらくして、理沙はようやく泣き止んだ。

理沙

「ありがと、伊澄君・・・」

伊澄

「どういたしまして」

伊澄は微笑む。

理沙

「助けてもらったんだし、何かお礼がしたいです・・・私にできる事なら何でも言っして下さい！！」

助けられたためか、敬語になる理沙。

伊澄

「そうですね・・・あ、理沙さんってメイドとかご存知ですか？」

理沙

「メイド・・・ですか？まあ私は社交会に出てますし、マリアさんとも面識ありますから多少はわかりますが・・・それが何か？」

伊澄

「実は私、最近幼なじみが雇ったメイドさんからメイド魂というの

を覚えてもらっていたのですが・・・」

理沙

「巫女さんがメイド魂をですか？」

伊澄

「その、私・・・物覚えが悪い方なのでうまく覚えられなくて・・・」

「

理沙

「（スルーされた！？今、思いつきスルーされたよね私の言葉！）ハア、それで私にあなたのメイドになってほしいと・・・？」

伊澄

「そういう事です。あの・・・ダメですか？」

理沙

「い、いえ！あなたは私にとって命の恩人ですし、喜んでやらせていただきます！！」

理沙は鷺之宮家のメイドになる事を決意した。

伊澄

「では、着替えてから行きましょうか。」

理沙

「行くって、どこにです？」

伊澄

「私の幼なじみのやってるメイド喫茶にですよ。理沙さんにはそこ

できればメイドのバイトをしてもらいます。」

理沙

「やっぱりそうなるんですね。」

その後理沙は1度朝風家に帰り白皇の制服に着替えた後、伊澄と共にメイド喫茶に向かった。

メイド喫茶『ひまわり』

伊澄と理沙は、メイド喫茶・ひまわりにやって来た。

理沙

「伊澄君、ここが・・・?」

伊澄

「ええ、私の幼なじみの喫茶店ですよ。咲夜〜!!」

伊澄が叫ぶと、中からグレーのショートヘアをした女の子が出て来た。

愛沢咲夜

「おお、伊澄さん。今日は迷わず来れたんやね?」

伊澄

「今日は連れがいたから。あ、そっだわ咲夜。この娘が・・・」

咲夜

「初穂さんから話は聞いとる。朝風家の娘で、巫女さんなんやってな。」

理沙

「どうも。朝風理沙です。」

咲夜

「ウチは愛沢咲夜や。それにしても・・・カワイイけど、無愛想な娘やなあ。」

理沙

「悪かったですね、無愛想で・・・」

伊澄

「彼女、ここでメイドさんのバイトをやりに来たの。」

咲夜

「さやか。ほな、ちゃっちゃと中入るで。」

伊澄達3人は、店へと入る。

理沙

「ここ、咲夜君の家が経営してるんですか？」

咲夜

「そやで。最初は『メイドカフェ・サク ニャン』いう名前やったんやけどな、看板がム力つくから『メイド喫茶・ひまわり』に変えてもろたんや。」

理沙

「そうなんですか・・・」

咲夜

「そついや、自分学校はどこなんや？」

理沙

「えと、白皇学院ですけど・・・」

咲夜

「白皇学院・・・あれ？そついやこないだ雇ったメイドさんも白皇学院生やて言つてたな・・・」

理沙

「同じ白皇学院生？（誰なんだろ、それって・・・？）」

理沙は考える。

咲夜

「ほな、この部屋が更衣室やからここで着替えてな。ウチらはモニタールームにおるさかい。」

理沙

「はあい。」

咲夜と伊澄はモニタールームに向かった。

理沙

「とりあえず、着替えよ・・・」

理沙は更衣室のドアをノックする。

ほどなく、1人のミニスカメイドが出て来た。

「いらっしゃいませ！ バイトですか？ って・・・え!？」

理沙

「・・・!!」

理沙は一瞬硬直する。

なぜなら、そこにいたのは・・・

理沙

「ち・・・ちは・・・ムグッ!!」

ガバッ!!

理沙はミニスカメイドの手で口を塞がれ、更衣室に連れ込まれた。

ボタン!

理沙

「プハッ! ち、千桜・・・だよね・・・?」

春風千桜

「ああ・・・そうだよ・・・」

そう・・・

ミニスカメイドの正体は、理沙と同じ白皇学院生の春風千桜だったのである。

理沙

「何してるんだ？こんな所で・・・」

千桜

「見ればわかるだろう・・・メイドのバイトだよ。」

理沙

「さつき咲夜君が言ってた『白皇学院生のメイド』って・・・千桜の事だったのか・・・ってか何でバイトを？」

千桜

「元々は父さんの会社が倒産しそうになったんで始めたバイトだったんだが、結局融資してくれる人が見つかってな。人目につきにくいからって事で、咲夜さんの専属メイドになったんだ。」

理沙

「まさか堅いイメージのある書記の千桜の口からダジャレが聞けるとは思わなかったよ。」

千桜

「失礼なヤツだな・・・そういう理沙の方こそ、何でメイド喫茶でバイトなんかを？寶銭箱泥棒が出て神社の経営が赤字にでもなったのか？」

理沙

「イヤ、そうじゃなくて・・・」

千桜

「じゃあ神社が火事にでもなったのか？」

理沙

「それもちがうわあ!!」

千桜

「だったら一体何なんだ・・・」

理沙

「伊澄君に命の危機を救われたんだ・・・そのお礼にだよ。」

千桜

「フーン・・・巫女の理沙らしい出会いだ。私とは随分出会い方がちがうんだな。」

理沙

「千桜はそんな出会い方じゃなかったのか？」

千桜

「ああ・・・単にゲーセンでヴァリアン１２と一緒にやって意気投合しただけだ。」

理沙

「・・・いかにも千桜らしい出会い方だな・・・」

千桜

「じゃあ、早速メイドの指南をしましょう。」

理沙

「お願いします。」

伊澄と咲夜は、モニタールームでメイド達の様子を観ていた。

伊澄

「相変わらずギクシャクしてるわね、他のメイドさん達・・・」

咲夜

「ホンマやな。これじゃせつかくのメイド服が活かされへんっちゅうねん。」

伊澄

「理沙さんは大丈夫かしら・・・」

咲夜

「ハルさんが直々に指南するんや、多少はいけるやろ。」

伊澄と咲夜は少なくともそう思っていた。

しかし数分後・・・

千桜・理沙

「お帰りなさいませ、ご主人様あゝ」

キャル〜ン&キャピー〜ン

咲夜

「ボフッ!!」

伊澄

「ブホッ!!」

千桜と理沙のあまりの息の合いように、咲夜と伊澄は飲んでいたコーヒーと紅茶を吹き出した。

千桜

「お帰りなさいませご主人様。今日は何になさいます?」

理沙

「コーヒー?紅茶?それとも私達のえ・が・お」

咲夜・伊澄

「・・・」

咲夜

「あの2人息ピッタリやな。」

伊澄

「そうね。知り合いだったのかしら。」

伊澄はともかく、理沙と千桜が同じ白皇学院生である事を咲夜が知る由もない。

2人は理沙と千桜の働き振りを微笑んで観ていた。

こうして朝風理沙は、青いミニスカメイド『リン』として鷺之宮伊澄の専属メイドになったのである。

余談だがその後、咲夜の誕生日パーティで理沙と千桜が愛歌に正体を見破られその事を弱点帳に書かれてしまったのは言うまでもないだろう・・・

朝風理沙&春風千桜編・完

第08話：ソニア・シャフルナーズ編『シスターと執事の恋物語』前編

某料亭

「久しぶりですね、ソニアさん。」

「そうですね、ハヤテ君。」

ハヤテ

「では、お見合いを始めましょうか・・・」

ソニア

「ええ、そうですね・・・」

ハヤテとソニアは、お見合いを始めた。

なぜこの2人がお見合いを始めたのかというと、その理由は5年前にさかのぼる・・・

5年前

綾崎ハヤテ、16歳。

三千院家で執事をしている少年だ。

彼は今日、ビデオを借りるためにワタルの店に来ていた。

レンタルビデオVタチバナ

ウィーン！

ワタル

「いらっしやいませ。って、ハヤテか。」

ハヤテ

「どうも、ワタル君。またDVD借りに来ました。」

ワタル

「そういや、こないだナギが大量に借りたDVDの中にヴァタリアン混ざってただろ？」

ハヤテ

「ええ、まあ。」

ワタル

「大丈夫だったのか？あの後。」

ハヤテ

「ええ、お嬢様やマリアさんにしばらくしがみつきましたが・・・」

「

ワタル

「あゝ、やつぱりな。あのDVDを取り寄せた時にオレも内容を見見たんだが、あまりに怖かったのかサキがしばらくがみついてきたからなあ。女には刺激が強すぎるんだよな、あれ。」

ハヤテ

「ですよね。」

ハヤテとワタルが話していると、ソニアが店に入ってきた。

ウィーン！

ソニア

「こんにちは。」

ハヤテ

「あ、シスター。」

ワタル

「久しぶりだな、シスター。」

ソニア

「こんにちは、ワタル君」

ソニアは嬉しそうにワタルに挨拶している。

そう・・・

ソニアはアレキサンマルコ教会での戦いの日から、ワタルの事が好きになったのだ。

ショタコンじゃないのか？とか、犯罪じゃないのか？などという問題は置いておく。

ソニア

「お目当てのDVD探して来ますね〜。」

ソニアは上機嫌でDVDを探しに行った。

タタタ・・・

ワタル

「シスターのヤツ上機嫌だな・・・何でだ？」

ハヤテ

「（君の事が好きだからですよワタル君・・・）そういえば、サキさんは？」

ワタル

「ああ、サキなら・・・」

ワタルがそこまで言った時、サキが店に帰って来た。

ウィーン！

貴島サキ

「若、ただ今戻りました〜。」

ワタル

「おお、お帰り。」

ハヤテ

「サキさん、お邪魔してます。」

サキ

「あら、ハヤテさん。いらっしやいませ。」

ハヤテ

「サキさんどこに出かけてたんですか？」

サキ

「え、えつと・・・それは・・・」

サキはワタルの方を見ながら、顔を赤くしモジモジしている。

ハヤテ

「え？まさかサキさん・・・」

ワタル

「ああ・・・サキはオレと婚約したんだ・・・」

ワタルも赤面しながら言う。

ソニア

「（・・・え？）」

DVDを持って戻って来たソニアは、足を止めてしまった。

ハヤテ

「いつそんな仲になったんです？」

ワタル

「こないだよ。オレ、伊澄に告白したんだがフラれちゃってな。夜通し泣いてたオレをサキが慰めてくれたんだ・・・」

サキ

「私、こないだベガスのカジノで美琴様と対決した日の夜気づいたんです。私は若の事が好きなんだと・・・」

ハヤテ

「それで、どちらから告白を？」

サキ

「わ、私からです・・・で、今日は婚約指輪のサイズを測りに・・・」

「

ハヤテ

「それはおめでとついでいます！」

カシャン！

ハヤテ・ワタル・サキ

「？」

ハヤテ達が音のした方を見ると、ソニアが床に落ちたDVDを拾っていた。

ソニア

「ワ、ワタル君・・・今日はこれを借りていきますね・・・」

ワタル

「あ、ああ・・・」

ソニアは会計を済ませると、足早に店の入口に走って行く。

タタタ・・・

ワタル

「どうしたんだ？シスター・・・」

ワタルは首をかしげる。

ハヤテ

「ハア・・・」

ハヤテはため息をついた。

サキがビデオ屋に戻った頃、ビデオ屋の前に怪しいベンツが止まっていた。

「またやるんスか、アニキ？」

「ああ・・・もうオレ達に手段は選べねえんだ。」

そう、この2人組は例の誘拐犯コンビである。

前にワタルを誘拐しようとしてサキを誘拐しソニアに倒されて逮捕され、こないだまた脱獄してきたのだが、まるっきり懲りずにまた誘拐をしようとしているようである。

「でもアニキ・・・前にオレ達このビデオ屋のガキを誘拐しようとしてメイドさん誘拐して失敗しちゃったんじゃないかったでした？」

「ああ・・・オレはあれから考えてみた。どうせ誘拐するんなら2人まとめたの方が、身代金の額が増えるだろうってな!!」

「流石頭良いゼアニキ!頭の仲がハイパーコンピューター並だ!!」

こういうところまったく進歩していない。

「じゃあ早速行くぞ!!」

「はい!!」

2人組は車を出てビデオ屋に向かう。

ビデオ屋に入ろうとした2人は、ビデオ屋から出て来たソニアにぶつかった。

ドカツ!

「うおっ!」

ソニア

「キャッ!」

「すみません、いきなりぶつかって・・・ん?」

ソニア

「いえ、私こそ前方不注意で・・・え?」

2人組とソニアは、お互いをジーツと見る。

ソニア

「あら？あなた達は確か・・・」

「ヤベエ・・・まさかこんな所であん時のシスターと会うとは・・・」

「どうします？アニキ・・・」

「仕方ねえ！復讐も兼ねてこのシスターを誘拐だ！！」

「ヘイ！」

2人組は次の瞬間、ソニアの手を引っ張った。

グイッ！

ソニア

「キャッ！！」

ソニアは車に乗せられる。

ソニア

「だ、誰かあゝ！！」

ソニアは叫ぶ。

その声を聞いて、ハヤテとワタルがビデオ屋から出て来た。

ハヤテ

「シ、シスターー!!」

「チイツ!早く車出せ!!」

「はい!!」

2人組は車を発進させる。

ブオオオン!

あっという間に車は遠ざかって行った。

サキ

「若、どうかなさったんですか!?!」

サキがビデオ屋から出て来た。

ワタル

「シスターが、前にオマエを誘拐した2人組にさらわれたんだよ!!」

サキ

「た、大変!早く警察に連絡しないと!!」

ワタル

「ああ、そうだな。ハヤテ!アンタは2人組の車を・・・」

ワタルがハヤテのいた方を向いた時、既にハヤテはいなかった。

ワタル

「つて、もういねえ!!」

サキ

「車追うの早いですねえハヤテさん・・・」

サキはなぜか感心していた。

一方誘拐されたソニアは、車の後部座席に乘せられていた。

ソニアは手足をロープでグルグル巻きに縛られている。

ソニア

「あ、あの・・・あなた達・・・」

「何だ、シスター？言っておくが泣き叫んだってムダだぞ？」

ソニア

「迷える子羊達よ・・・今すぐ私を解放して自首しなさい・・・」

「ああ？何言つてやがんだオマエ？」

ソニア

「ハヤテ君から話は聞いてます。あなた達は前に三千院さんを誘拐しようとして失敗した事があると。そして前にもワタル君を誘拐しようとしてサキさんを誘拐し私に倒された。2度も失敗しているというのに、どうしてまたこんな事をするのです？」

「フン、アンタにはわからねえよ！オレ達や金のためには手段を選んでられねえんだ！」

ソニア

「哀れですね・・・」

「何だと・・・？」

ソニア

「私もハヤテ君達と出会うまでは、三千院家への復讐しか考えていませんでした。でもそんな私だつて彼らと交流して変わったんです！あなた達だつてきつと変わるハズ！今からでも遅くありません！ちゃんと罪を償つて・・・」

「うるせえんだよ、小娘が！こうなりや大人をバカにするとどうなるか体に教えてやるぜ！！」

「おい弟よ！オマエやつぱり年下好みなのか？」

ソニア・シャフルナースは19歳です。

つまりこの2人組より年下。

助手席に座っている弟の手がソニアに迫る。

ソニア

「あ・・・あ・・・」

ソニアの脳裏に、ハヤテの顔が浮かぶ。

ソニア

「ハ、ハヤテくゝん!!!」

ソニアが叫んだ、その時だった。

ヒュオオオオオ・・・

上空からの風が槍のように降り、ボンネットを貫いた。

ドスッ!!

「ゲッ!？」

車が急停車する。

次の瞬間、空から飛んで来たハヤテがボンネットに着地した。

ズドッ!!

「ヒイイツ!？」

ハヤテ

「その人をボクに・・・返してくれます?」

「は、はい・・・」

2人組は震える。

ソニア

「・・・」

その後、2人組は再び警察に逮捕され連行されて行った。

ソニア

「あ、ありがとうございますハヤテ君、助けていただいて・・・」

ソニアはハヤテにお礼を言う。

ハヤテ

「いえいえ。困った時はお互い様ですから」

ハヤテは笑顔で微笑む。

ソニアはその笑顔に見惚れた。

ハヤテ

「じゃあまた今度。」

ハヤテはそう言うと、疾風の如くで帰って行った。

ソニア

「綾崎ハヤテ君・・・かあ・・・」

ソニアはしばらく頬を染めていた。

それから1週間後・・・

白皇学院

ハヤテはいつものように、白皇学院に登校して来た。

今日は珍しくナギの姿もある。

ガラッ！

ハヤテとナギが教室に入ると、何やら教室が騒がしかった。

ナギ

「おい伊澄、何かあったのか？やけに教室がザワついているんだが・
・・」

伊澄

「それはですね・・・」

瀬川泉

「あ、ハヤ太君ナギちゃんおはよう！」

花菱美希

「ハヤ太君、聞いた？何でもこのクラスに新しく転校生が来るんだ
つて。」

ハヤテ

「転校生？」

朝風理沙

「間違いないよ。さつき雪路が職員室で話してるのを聞いたからな。ちなみに性別は女の子だそうだ。」

ハヤテ達が談笑していると、クラスの担任である桂雪路が教室に入ってきた。

ガラッ！

桂雪路

「みんな、席に着きなさい！！！」

ハヤテ達は慌ただしく着席する。

雪路

「出席を取る前に転校生を紹介します。入って来て！」

「はい。」

ガラッ！

ドアが開き、転校生が入ってくる。

ハヤテ・ナギ・ヒナギク・伊澄・ワタル

「ああ！！！」

ハヤテ達5人は、その転校生に見覚えがあった。

なぜなら、その人物は・・・

ソニア

「シチリアから編入生として転校して来た、ソニア・シャフルナーズです。よろしくお願いします」

ソニアは挨拶した。

雪路

「シチリアから転校して来たソニア・シャフルナーズさんです。みんな仲良くしてあげてね。じゃあ、シャフルナーズさんの席はあそこね。」

ソニア

「はい。」

ソニアはハヤテの隣の席へと歩いて行き、席に着席した。

トッ！

ソニア

「これからよろしくね、ハヤテ君」

ハヤテ

「ハア・・・」

ヒナギク

「どうして・・・シスターが白皇に・・・」

誘拐犯から助けしてくれたハヤテに一目惚れし、白皇学院に転校して来たソニア。

波乱は必至だ！？

そして昼休み

ハヤテ達は食堂で昼食を取っていた。

ハヤテの横にはソニアがいる。

ナギ

「ハヤテのヤツ、いつの間にシスターと仲良く・・・」

ヒナギク

「ハヤテ君、彼女とはいっつ仲良くなったの・・・？」

ナギやヒナギクの表情が何気に黒い。

ワタル

「確かこないだウチのビデオ屋にシスターが来て・・・サキと婚約した事をハヤテに話したら急に外に出ちまって・・・そしたら例の2人組がシスターを誘拐して・・・ハヤテが助けに行つて・・・んで、こうなった。」

ナギ・ヒナギク

「・・・」

伊澄

「スゴいワンパターンですね・・・」

ソニア

「ハヤテ君、あぐんしてください」

ソニアは自分が作って来たお弁当のおかずをハヤテに差し出した。

ハヤテ

「えええええ!!」

ハヤテは自分の周りを見たが、やはり空気が重い。

まるで、『早くやりなさい』と言われているようだ。

仕方がないので、ハヤテは口を開けた。

すかさずソニアがおかずをハヤテの口に放り込む。

パクッ!

モグモグ・・・

ゴクン!

ソニア

「ど、どうですか?」

ハヤテ

「はい、おいしいです ソニアさんって料理上手なんですね。」

ソニア

「そ、そんな・・・いきなり名前で・・・」

ソニアは頬を染めた。

それにより怒ったナギ達がソニアに詰め寄る。

ナギ

「あゝもー！何なのだ、シスター！？さっきからハヤテにベタベタしおって!!」

ヒナギク

「そ、そうよ！私だってまだこんなをした事ないのに!!」

ソニア

「そ、そんな！私、別にそんなつもりは・・・」

伊澄

「と、とにかく！シスターがこういう経緯でハヤテ様に惚れたのはわかりましたが!!」

泉

「昨日今日惚れたばかりのソニアちゃんに、そう簡単にハヤ太君を渡すワケにはいかないよ!!」

ナギ達の空気が重い。

「相変わらず賑やかだな。」

突然の声にハヤテ達が振り向くと、理事長の葛葉キリカが立っていた。

葛葉キリカ

「このままでは埒がアカン。そういうワケで・・・この度ある企画をする事にした！」

ハヤテ・ナギ・伊澄・ワタル・ヒナギク・泉・美希・理沙・千桜・
愛歌・ソニア

「ある企画？」

キリカ

「名づけて・・・第1回綾崎ハヤテ争奪・無差別武道大会だ！！」

ハヤテ・ナギ・伊澄・ワタル・ヒナギク・泉・美希・理沙・千桜・
愛歌・ソニア

「無差別武道大会！？」

キリカ

「さよう。綾崎ハヤテを賭けて、トーナメント戦をしようじゃないかという事だ。優勝者は綾崎ハヤテを好きな日に1日だけ独占でき、何でも言う事を聞いてもらう事ができる・・・というのはどうだ？」

ハヤテ

「ちよつ、ボクに拒否権はないんですかあゝ！？」

キリカ

「無論、ない！おぬしは多数の人間に好意を持たれておる事を1度自覚すべきだ。」

ハヤテ

「そんなあゝ・・・」

愛歌

「それで、その武道大会とやらはいつにするんです?」

キリカ

「明後日、白皇学院の講堂にて執り行う。もしかしたら学院外からも挑戦者が現れるかもしれんからな。」

ハヤテ

「ハアア・・・」

ハヤテはため息をついた。

キリカ

「それではな。」

キリカは食堂から出て行く。

ソニアはしばらくハヤテの事について考え込んでいた。

明後日

ナギ達はハヤテ争奪無差別武道大会に出場するため、講堂へとやって来た。

最初に決まった出場者は、ナギ・ソニア・ヒナギク・泉・美希・理

沙・千桜・愛歌・伊澄。

今日になって急遽出場を決めたのは、虎鉄・氷室・康太郎・ワタル・雪路・詩音。

学院外からの出場者は、咲夜・歩・謎の男。

ヒナギク

「ついにきたわね、この日が・・・」

ナギ

「絶対に優勝してやるぞ・・・」

ナギやヒナギクのようにハヤテとの仲を進展させるのが目的の者もいれば、美希や愛歌のように動画や弱点帳のネタにしようとしている者もいた。

ソニア

「それで、ハヤテ君は今どこに？」

ナギ達は辺りを見回す。

キリカ

「よく来たな、出場者よ！オマエ達が求める綾崎ハヤテは・・・ここだ！」

声のした方にナギ達が振り向くと、そこにはキリカがいた。

横に、檻に閉じ込められたハヤテの姿もある。

しかもなぜか、ハヤテはウェディングドレスを着せられていた。

愛歌

「理事長・・・なぜ綾崎君がウェディングドレスを着せられているんですか？」

キリカ

「え？だって綾崎は景品だろう？景品なんだから趣向を凝らそうと思っただけ。」

泉

「私の時と同じ理屈！？」

泉が叫んだが、キリカはその意味がわからなかったのかスルーした。

ソニア

「後で泉さんに詳しく話を聞こう・・・」

ソニア（愛歌も）はそう思った。

瀬川虎鉄

「綾崎・・・何てカワイらしい格好だ・・・」

虎鉄は１人興奮していたが、一方で康太郎やワタルもハヤテのドレス姿に見惚れてはいた。

氷室は興味がない様子だったが。

ナギ

「それで、トーナメント表はどうなってるんです？」

キリカ

「よくぞ聞いた！出場者のトーナメント表は、こうだー！」

キリカはトーナメント表がある方を指差した。

ソ瀬瀬三桂春霞愛？鷺佐東朝花桂西橘暮
二川川千 風 沢？之伯宮風菱ヒ沢 里
ア 虎院雪 愛 ？宮 康 ナ ワ

泉鉄ナ路千歌咲？伊氷太理美ギ歩夕詩
ギ 桜 夜？澄室郎沙希ク ル音

美希

「私、ヒナとなのお・・・？」

咲夜

「誰なんやろ、ウチの対戦相手って・・・」

キリカ

「ソニア君と詩音はシード選手だ。準決勝まで待ってもらっ。」

ソニア

「フウ、準決勝まで待ちますか・・・」

キリカ

「それでは早速第1回戦をしてもらおう。瀬川泉VS瀬川虎鉄!!」

ナギ

「兄妹対決か。どうなるか見物だな。」

こうして、第1回綾崎ハヤテ争奪・無差別武道大会は始まった。

キリカ

「それでは早速第1回戦をしてもらおう。瀬川泉VS瀬川虎鉄!!」

ナギ

「兄妹対決か。どうなるか見物だな。」

泉

「行くよ、虎鉄君。」

虎鉄

「私の目的は綾崎とオーストラリアで式をあげる事。それを邪魔する者は、たとえ妹でも倒す!!」

虎鉄は瀬川家にあつた剣を握り、泉に斬りかかった。

美希

「マズい・・・虎鉄のヤツ、本気で泉を倒す気だ!」

泉

「それが虎鉄君の本音なの・・・なら、その性根叩き直さないかね。」

「

泉が左手を前に向けると、次の瞬間虎鉄の剣の上半分が吹き飛んだ。

ドン！！

虎鉄

「え．．．？」

美希

「虎鉄の剣が吹き飛んだ！？」

理沙

「イヤ、それ以前に．．．」

ヒナギク

「泉の左手に握られてるの．．．木刀．．．？」

泉

「瀬川家に代々伝わる妖木刀．．．村正だよ。虎鉄君がただハヤ太君と男友達になりたいなら、私は妹として応援したい。でも．．．度が過ぎてハヤ太君に迷惑をかけるようなら．．．私は虎鉄を許さない。」

泉は村正を握ると、虎鉄に斬りかかる。

ゴオツ！

虎鉄

「うわあああ！！」

泉は村正を振るい、虎鉄の剣を粉々に破壊した。

バキィ！！

虎鉄

「わぁ、待て待て泉い！！」

泉

「待たない。容赦しない。」

泉は村正を振り下ろし、虎鉄を強打した。

ドゴォ！！

虎鉄は気絶する。

泉

「しばらく1人でメキシコにでも行って来なさい。」

キリカ

「だ、第1回戦・・・勝者、瀬川泉・・・」

ヒナギク・千桜・愛歌

「こ・・・」

理沙・美希・ナギ

「怖すぎる！！」

ソニア

「っていつより私・・・あの子と当たったら勝てるかしら・・・」

ソニア達は泉の鬼神ぶりに恐怖していた。

キリカ

「第2回戦・・・三千院ナギVS桂雪路!!」

ナギ

「桂先生かぁ・・・調子狂うな。」

桂雪路

「私が優勝よ!んでもって綾崎君には1日中たかってタダ飯だあ!
!」

雪路もどうやら、ハヤテにたかる事が目的のようだ。

少しお酒臭い。

ヒナギク

「お姉ちゃん、1杯飲んで来たわね・・・」

ナギ

「大丈夫だよ、ヒナ。私はあんな飲兵衛に負ける気は・・・さらさら
ないから。」

ナギの言葉通り、その後雪路は5分も経たずにナギに負けた。

キリカ

「第3回戦・・・春風千桜VS霞愛歌!!」

愛歌

「私が優勝したら、綾崎君にたくさん話が聞けますわ。弱点帳のペ
ージも増えますねえ。」

千桜

「そうはさせませんよ、愛歌さん・・・特殊メガネ装着!!」

千桜はMHEが開発した特殊メガネをかけた。

千桜

「メガネビーム!!」

千桜はメガネからビームを放った。

ビッ!

愛歌

「キヤアッ!?!」

愛歌は間一髪避ける。

愛歌

「千桜さん、私を殺る気ですかあ!?!」

千桜

「ドンドン行きますよお!!」

千桜と愛歌の攻防戦は33分も続き、最終的に体力切れで愛歌がギブアップした。

愛歌

「（後で覚えてなさい・・・）」

キリカ

「第4回戦・・・愛沢咲夜VS謎の男!!」

「ついに・・・ついにこの日がきまーしター!!」

謎の男は羽織っていたローブを脱ぐ。

ギルバート・ケント

「ワタシが優勝した暁にはー!綾崎ハヤテに三千院ナギが土下座するように要求して三千院家の遺産を我が手に・・・」

咲夜

「オドレはいっぺん死んで来いっつー!!」

パッカーン!

ギルバート

「オーノー!ワタシの出番これだけですカァー!?!」

キラーン・・・

ギルバートは星となり、わずから秒で咲夜が勝った。

ワタル

「何しに来たんだ?あの外国人・・・」

ナギ

「さあ?バカやりにじゃない?」

キリカ

「第5回戦！鷺之宮伊澄VS佐伯氷室！！」

伊澄

「あなたがこの試合に出場するとはね。」

佐伯氷室

「フツ。ボクはどうしても勝たないといけないのだよ・・・ボクはお金が好きだからね。」

ナギ

「ダメだこの人・・・」

ソニア

「少しも進歩してませんね。」

伊澄

「そういう人なら、尚更私が負けるワケにはいきませんね。」

氷室

「フッフ、ボクもバカじゃあないからね・・・手っ取り早く優勝できる方法を取らせてもらうよ。ダークホースをここで討つ！！」

氷室はバラを伊澄に向かって数発放った。

シュツ！

伊澄

「甘いですね、氷室さんも・・・」

伊澄はお札を取り出す。

伊澄

「八葉六式・・・拡散・撃破滅却。」

伊澄はお札を数發放ち、氷室のバラを消し飛ばした。

バシユ、バシユ！

氷室

「クッ！！」

伊澄は氷室に近づく。

スッ！

伊澄

「まだ・・・やりますか？」

氷室

「う・・・ギブアップだ・・・」

氷室はギブアップした。

キリカ

「勝者、鷺之宮伊澄！！」

第6回戦は、朝風理沙VS東宮康太郎だ。

理沙

「なぜ東宮君、このトーナメントに参加したのかね？」

東宮康太郎

「綾崎は女顔だけど心が強い。アイツに鍛えてもらえれば、野々原に頼らずとも強くなれるって思ったんだ。そういう朝風は何でだ？花菱のように動画のネタにしたいとか？」

理沙

「私は美希や愛歌さんとはちがう。なぜか最近ハヤ太君の顔を見ると頬が火照るんだ。この気持ちの正体を確かめたい！」

康太郎

「なるほどな。だけど、女のアンタがボクに勝てるかな？」

そう言つて、康太郎は理沙に挑んだが・・・

やはり数十秒で理沙に敗北した。

ピクピク・・・

康太郎

「・・・」

ナギ

「私より体力ないだけはあるな。」

キリカ

「第7回戦！花菱美希VS桂ヒナギク！！」

ヒナギク

「さあ、勝負よ美希。」

美希

「あ、あのさヒナ・・・」

ヒナギク

「何？」

美希

「私、棄権しても良いかしら・・・」

ヒナギク

「何言ってるの、美希？勝負は勝負よ。甘えは許されないわ。」

美希

「ちよつ、待ってヒナ・・・」

ヒナギク

「問答無用！！」

美希

「キャー！！！」

ヒナギクは正宗を振るい、美希を追い回す。

美希は40分も逃げ続け、結局体力切れで倒れた。

美希

「もう・・・ダメ・・・」

バタリ！

ヒナギク

「だらしないわね、美希。」

泉

「ヒナちゃん……」

理沙

「容赦ないな……」

最後の第8回戦は、西沢歩と橘ワタルだ。

西沢歩

「珍しいね、ワタル君がこんなに出るなんて。」

ワタル

「ハヤテはオレの憧れだ。アイツに男気を教えてもらうんだ。」

歩

「悪いけど、私は負けないよ。」

歩とワタルの戦いは、30分経っても続いた。

しかも、歩がワタルを圧倒している。

ワタル

「何だ、歩のこの気迫……いつものアイツじゃねえ……」

歩

「言っただでしょ？私は負けない……って。」

歩はワタルに突っ込むと、彼を一本背負いで投げ飛ばした。

ブンッ！！

ワタル

「うわぁっ！！」

ドッ！！

ワタル

「う・・・」

ワタルは気絶する。

キリカ

「勝者、西沢歩！！」

ナギ

「バカな・・・ワタルがハムスターに負けた・・・」

歩

「だからハムスターじゃないわよナギちゃん！！」

1回戦～8回戦までが終わり、泉・ナギ・千桜・咲夜・伊澄・理沙・ヒナギク・歩の8人とシード選手であるソニア・詩音の10人が残った。

第09話：ソニア・シャフルナーズ編／シスターと執事の恋物語『中編』

キリカ

「それでは第9回戦！瀬川泉VS三千院ナギ！！」

泉

「よろしくね、ナギちゃん」

ナギ

「う・・・私、勝てるかなあ・・・」

ナギは震えている。

泉

「行くよ、ナギちゃん！！」

泉は村正を握りナギに突っ込んだ。

ドンッ！

ナギ

「わああ！！」

ナギは必死に避ける。

泉

「逃げてばかりじゃ私には勝てないよ？」

ナギ

「クツ、仕方ない・・・MHEで作ってもらったこれを使おう。」

ナギはGペンのような物を数個取り出した。

ナギ

「唸れ、私のGペン!!」

ナギはGペン型の武器を矢のように数発放つ。

シュツ!

だが、泉はそれを全て叩き落とした。

ドカカカ!

ポトツ!

ナギ

「そ、そんな!」

泉

「今度は私の番だよ。」

泉はナギの背後に素早く回り込み、ナギの頭を木刀で叩く。

パコン!

ナギ

「う!!」

ナギは床に倒れた。

ドサッ！

キリカ

「勝者、瀬川泉！！」

続く第10試合目は、千桜が棄権し咲夜の不戦勝となった。

次は第11試合目、伊澄VS理沙だ。

理沙

「伊澄君は強い・・・なら、私も本気でやる！！」

理沙は朝風神社から持って来た薙刀ナギナタを袋から取り出し、構える。

理沙

「行くぞ！伊澄君！！」

理沙は薙刀を振るい伊澄に突っ込んだ。

理沙

「ハアッ！！」

理沙は薙刀で伊澄を攻撃する。

だが、伊澄は軽快にそれを避けた。

理沙

「クッ、当たらない！！」

伊澄

「今度は私の番ですよ。八葉六式・・・集束・撃破滅却!!」

伊澄はお札から光線を放つ。

ドンッ!!

理沙は薙刀を両手で持ち光線を防ごうとしたが、耐えきれず壁に吹き飛ばされた。

理沙

「キャアアア!!」

ドゴォ!!

薙刀が折れた理沙は、床に沈んだ。

ドサッ・・・

咲夜

「つ、強い・・・」

ナギ

「これが伊澄の実力なのか・・・」

キリカ

「第12回戦! 桂ヒナギクVS西沢歩!!」

ヒナギク

「歩・・・まさかあなたと戦う事になるとはね・・・」

歩

「ヒナさん・・・私は負けませんよ。」

ヒナギクと歩の戦いは、30分経ってもまだ終わらなかった。

ヒナギクの剣術と歩の体術はほぼ互角で、両者1歩も譲らない戦いが続く。

45分経った後、歩の一本背負いを耐えたヒナギクが歩を強打し、ヒナギクが勝利した。

キリカ

「さあ、次は準々決勝戦！瀬川泉VS愛沢咲夜！！鷺之宮伊澄VS桂ヒナギク！！同時試合、始め！！」

泉

「お手柔らかにね、咲夜ちゃん」

咲夜

「あ、ああ・・・」

泉と咲夜の戦いは20分続き、最終的に泉が勝利した。

泉

「ヒナちゃん、そっちはどお？」

泉はヒナギクの方を見る。

ヒナギクと伊澄の戦いは、まだ終わってはいなかった。

しかも、ヒナギクの方は伊澄に押され気味だ。

ヒナギク

「クツ・・・私の一撃が全然効かない・・・」

伊澄

「その程度ですか？せつかくの正宗が泣いてますよ。」

ヒナギク

「う・・・ヤアアアア！！」

ヒナギクは正宗を振り上げ、伊澄に突っ込んだ。

伊澄

「八葉六式・撃破滅却。」

伊澄はお札から光線を放つ。

ゴツ！！

ヒナギクは正宗を両手に持ち光線を防ごうとするが、正宗ごと壁に吹っ飛ばされる。

ヒナギク

「キヤアアア！！」

ドゴォ！！

ヒナギク

「う・・・」

ヒナギクは床に倒れ、気絶した。

正宗は真つ2つに折れている。

美希

「あのヒナが・・・負けた・・・」

準決勝への進出者は、ソニア・泉・伊澄・詩音となった。

ちなみに、折れた正宗は後日鷺之宮家が修理する事になる。

キリカ

「ただ今から準決勝を始める！まずは、ソニア・シャフルナースV
S 瀬川泉！！」

泉

「よろしくね、ソニアちゃん」

笑顔の泉とは裏腹に、ソニアはビクビクしている。

ソニア

「（この子は笑顔の裏に強さを秘めてる・・・負けられない！！）」

キリカ

「開始！！」

泉

「行くよお!!」

キリカの声と同時に、泉はソニアに突っ込んだ。

ドンッ!!

ソニア

「わわっ!!」

ソニアはトンファーを前に出し攻撃を防ぐ。

ドカァ!!

ソニアのトンファーには、ヒビが入っていた。

ピシ!

ソニア

「ヒッ・・・」

泉

「ドンドン行くよお!!」

泉はソニアを攻撃する。

ドカァ!!

バキッ!!

ソニアのトンファーの片方が、真っ2つに折れた。

ソニア

「ウソ!？」

泉

「片方だけで、私の攻撃を防げるかな？」

泉は容赦なくソニアに突っ込む。

ソニア

「（この状況で泉さんに勝つには・・・これしかない!!）ハアッ
!!」

ソニアはトンファーを泉めがけて投げた。

ブンッ!

泉

「自ら武器を捨てるなんて・・・血迷ったの？」

泉はトンファーを叩き斬る。

ザンッ!!

その時、ソニアの姿が泉の視界から消えた。

泉

「あ、あれ!？ソニアちゃんは？」

ソニア

「私はここですよ！」

泉は声のした方に振り向く。

すると、真後ろにソニアがいた。

ソニア

「スキあり、ですよ？」

泉

「し、しまっ・・・」

ガシッ！

ソニア

「ハアアアアッ！！」

ソニアは泉を一本背負いでブン投げる。

ブンッ！！

泉

「キヤアアア！！」

泉は床に叩きつけられた。

ドシャッ！！

泉

「私の負けだね、ソニアちゃん」

準決勝第2試合は伊澄が詩音を圧倒的実力差で倒し、決勝戦へとコマを進めた。

詩音

「キリカ様あゝ！負けてしまいましたぁ・・・」

キリカ

「まあオマエがあの子に勝てる可能性は五分五分だったからな。それでは早速決勝戦を始めよう。ソニア・シャフルナーズVS・・・鷺之宮伊澄！！」

伊澄

「ソニアさん・・・戦うなら最初から全力で来てください。でなければ・・・大ケガしますよ？八葉六式・・・滅却波！！」

伊澄は札を振り、波動を放った。

ドンー！！

ソニア

「わわっ！！」

ソニアは慌てて予備のトンファーで防御する。

ガキーン！！

だが、トンファーにヒビが入っていた。

ピシ・・・

ソニア

「え!？」

伊澄

「言ったハズですよ? 最初から全力で来てくださいと。」

ソニア

「う・・・(こ、この子・・・強い!!)」

伊澄

「滅却・鎌鼬!!」

伊澄は風の刃を放った。

シュッ!!

ソニア

「わっ!!」

ソニアはトンファーで攻撃を防ごうとする。

だが、トンファーは鎌鼬に破壊された。

ザンッ!!

ソニア

「ウソ!？」

伊澄

「その程度ですか、あなたは・・・一気に決めさせてもらいますよ？八葉六式・・・集束・撃破滅却！！」

伊澄は強大な光線を放つ。

理沙

「私の時より数倍大きいぞ！！」

泉

「ソニアちゃん逃げて～！！」

ソニアは意を決すると、トンファーを斜めに構えた。

千桜

「何やってるんだ、彼女は？」

美希

「あんな事しても当たってしまっわよ？」

ヒナギク

「・・・イヤ！」

伊澄の光線がソニアのトンファーに当たる。

その時、トンファーが光線を弾いた。

ガキン！！

伊澄

「え！？」

伊澄は一瞬怯む。

ソニアはその一瞬のスキをつき、伊澄に突っ込み彼女を掴んだ。

ガシッ！

ソニア

「ハアアアアッ！！」

ソニアは伊澄を一本背負いで投げ飛ばす。

ブンッ！！

伊澄は床に叩きつけられた。

ドシャッ！！

伊澄

「私の負けですね・・・」

美希

「一体何が起こったの？」

ヒナギク

「彼女はトンファ―を斜めに構えたわ。そうする事で、あの光線を受け流したのよ。」

キリカ

「さて、優勝はソニア君となったワケだが・・・ソニア君、綾崎八

ヤテへの1日要求は何にするかね？」

ソニア

「えっと・・・それじゃあ・・・」

ソニアは照れながら言う。

次の瞬間、彼女の発言にナギ達は絶叫した。

そして、今週の日曜日

ハヤテは遊園地で、ソニアを待っていた。

ハヤテ

「ソニアさん、遅いなあ・・・」

ハヤテがそう呟いていると、ソニアの声が聞こえてくる。

ソニア

「ハヤテ君、お待たせ！」

ハヤテ

「ソニアさん、待ってましたよ！では、行きましようか。」

ソニア

「ええ。」

ハヤテとソニアは歩き出す。

その2人を、ナギ達がジーツと見ていた。

ナギ

「シスターめ・・・あんなにハヤテにデレデレと・・・」

ヒナギク

「ハヤテ君の腕掴んでる！私だってあんなのした事ないのに・・・」

「

歩

「2人のデート邪魔します？」

咲夜

「あんなあ、アンタら・・・」

千桜

「私達は負けたんですから、しょうがないでしょう？」

愛歌

「2人のデートを邪魔しようとしたら、理事長に言いますからね？」

愛歌に言われ、ナギ達はデートを邪魔する事を断念する。

伊澄

「皆さん、2人の尾行は私達がしておきますから・・・」

千桜

「自分達も遊園地を楽しんで来てはいかがですか？」

美希

「そうね。大勢でゾロゾロ尾行するのも何だし……」

ヒナギク

「任せるわね、愛歌さん達。」

ヒナギク達は解散した。

咲夜

「さて、ウチらはハヤテらの尾行を続けるとするか……」

咲夜達はハヤテとソニアの尾行を開始した。

ソニア

「ハヤテ君、次はどこに行きます？」

ハヤテ

「そうですね……オバケ屋敷なんてどうですか？」

ソニア

「オバケ屋敷ですか……私、苦手なんですよね……」

ハヤテ

「大丈夫ですって。さあ、行きましょう！」

ソニア

「あ、ちよっ・・・」

ソニアはハヤテに引つ張られ、オバケ屋敷に入って行く。

咲夜

「ハヤテら、オバケ屋敷に入って行きよったな・・・」

千桜

「まあ、大方展開の予想はつきますが・・・」

愛歌

「追いますよ!」

咲夜達も、ハヤテ達を追ってオバケ屋敷に入って行った。

ハヤテとソニアは、オバケ屋敷内を進んでいた。

ソニアはハヤテにしがみついている。

ハヤテ

「ソニアさん・・・動きにくいですけど・・・」

ソニア

「だ、だって・・・怖いんですもん・・・」

ソニアが震えていると、オバケが飛び出して来た。

バツ!!

『シャ〜!!!』

ソニア

「キャ〜!!!」

ソニアはハヤテに抱きつく。

ハヤテ

「ソニアさん、大丈夫です。ボクがあなたを守りますから。」

ソニア

「は、はい・・・」

ソニアは赤面する。

ハヤテ

「急ぎましょう!」

ソニア

「あ・・・」

ハヤテはソニアの手を握り、走り出した。

ダツ!

千桜

「ソニアさんも怖がりですね、あんな作り物を怖がるなんて・・・
ねえ、咲夜さん。」

ハヤテとソニアを見ていた千桜は、咲夜の方を向く。

千桜

「咲夜さん？」

伊澄

「咲夜も愛歌さんも、気絶してしまってますね……」

千桜

「あらま……」

咲夜と愛歌は、気絶していた。

伊澄達がハヤテとソニアに追いつくと、2人はレストランに入ろうとしていた。

伊澄

「ハヤテ様達、今から食事をするみたいですね。」

咲夜

「ちょうどええやん、ウチもお腹減ってきたわ。」

千桜

「じゃあ、私達も食事にします？」

愛歌

「そうですね、できるだけ近くに座りましょう。」

ハヤテとソニアはレストランに入っていく。

伊澄達も後を追った。

ハヤテとソニアは、注文した料理を食べていた。

ソニア

「おいしいですね、この特製カレーライス！」

ハヤテ

「でしょう？ここの特製カレーは絶品なんですよ。」

ソニア

「ハヤテ君が食べているスパゲッティもおいしそうだなあ……」

ハヤテ

「ソニアさんも食べたいんですか？」

ソニア

「え、ええ……」

ハヤテ

「じゃあ……アーン」

ソニア

「ア、アーン……」

ハヤテ

「えい」

ハヤテはフォークでスパゲッティを巻くと、ソニアの口に入れた。

ヒョイ！

パク！

モグモグ・・・

ゴックン！

ソニア

「おいしいです！」

ハヤテ

「それは良かったです」

ハヤテとソニアはお互い微笑んでいる。

その光景を見た伊澄達は、赤面していた。

ハヤテ

「そろそろおあいそしましょうか？」

ソニア

「そうですね。」

ハヤテとソニアは席を立つと、勘定を済ませ店の外に出る。

伊澄

「ハヤテ様達、外に出ましたね。」

千桜

「では、私達もそろそろ・・・」

「あのー、こちらに紫色の髪のお客様はおられますか？」

愛歌

「はい、紫色の髪は私ですが・・・何でしょうか？」

「先程のお2方が、これをあなたにと。」

店員は愛歌に四角い小さな箱を渡した。

愛歌

「何でしょう、これ・・・」

レストランの外に出た愛歌は、箱を開けてみた。

パカッ！

愛歌

「キャー！！！」

愛歌は悲鳴をあげ、気絶する。

バタッ！

千桜

「どうしたんですか、愛歌さん!？」

そう言つて千桜が小箱の中をのぞいてみると、中から小さなカエルが飛び出して来た。

千桜

「ああ、これが原因ですか・・・」

伊澄達は顔を見合わせ、苦笑いをした。

ようやく伊澄達はハヤテとソニアの居場所を突き止め、観覧車へとやって来た。

咲夜

「ハヤテとソニアはんは、ここにおるみたいやな。」

愛歌

「綾崎君め、よくもこの私に恥を・・・」

愛歌は拳を震わせている。

千桜

「愛歌さん、顔が怖いですよ・・・」

伊澄

「私達も乗りましょう。」

伊澄達は、観覧車に乗り込んだ。

ハヤテとソニアは、観覧車に乗っている。

ソニア

「ハヤテ君、今日は1日つき合ってくれてありがとうございます。」

ハヤテ

「いえいえ。ボクなんかで良ければ、いつでもつき合いますよ。」

ソニア

「ハヤテ君は本当に優しいんですね。三千院さん達が好意を抱くのもわかる気がします。」

ハヤテ

「そうですか？」

ソニア

「ええ。ところでハヤテ君、こないだはありがとうございました。」

ハヤテ

「ああ、あの2人組の件ですか。」

ソニア

「ええ。私、あの時は本当に怖かったです。もし何かされたらど

うしょうって・・・」

ハヤテ

「本当にあの時は災難でしたよね。」

ソニア

「ハヤテ君には本当に感謝してます。これはそのお礼です」

ソニアはハヤテの頬にキスをする。

チュッ

ハヤテ

「ソニアさん・・・」

ソニア

「また一緒に来ましょうね」

ハヤテとソニアは互いに赤面した。

ハヤテとソニアは、観覧車から降りて来た。

ハヤテ

「今日は楽しかったですね。」

ソニア

「ええ。私も楽しかったです。」

ハヤテ

「それにしても、もう辺りが暗いですね。」

ソニア

「そうですね。」

ハヤテ

「夜道の1人歩きは危険なので、教会まで送りますよ。」

ソニア

「危険って・・・私、19歳なんですけど・・・」

ハヤテ

「19歳でも女性である事に変わりありませんよ。」

ソニア

「そ、そうですね・・・じゃあ、お願いしようかしら・・・」

ハヤテ

「はい」

ハヤテはソニアをアレキサンマルコ教会まで送り届けた。

ハヤテ

「じゃあ、また明日」

ソニア

「ええ、また明日ですね。」

ハヤテは足早に帰って行く。

ソニアはそんなハヤテを顔を赤くしながら見つめていた。

その夜、教会の女子寮にて

シンディ・ローラ『22』

「へえー！ソニアちゃん今日、白皇の同級生とデートしてたんだ。」

「

ネイル・エヴァンズ『17』

「しかも相手は執事だったって話じゃないですか？」

ソニア

「え、ええ、まあ・・・」

ソニアは女子寮の部屋で、同志のシンディ・ローラやネイル・エヴァンズなどから質問責めに遭っていた。

ラナ・シュヴァング『15』

「それで？ソニアさんはその方に告白したんですか？」

ソニア

「ほえ！？ま、まだだけど・・・」

ニア・シュヴァング『20 ラナの姉』

「えー、ダメじゃない！ちゃんと告白しなきゃ！彼を好いてる人、

他にもたくさんいるんでしょ?」

ソニア

「え、ええ・・・」

ニア

「だったら早く告白しなさいよ!」

ラナ

「このままだとその方を他の子に取られちゃいますよ?」

ニア・ラナのシュヴァング姉妹の言葉に、ソニアはあわてる。

ソニア

「も、みんなからかわないでよ!!」

シンディ

「ソニアちゃん、カワイイ」

シンディ達は、ソニアの赤面する顔を見て面白がっていた。

その夜中、ソニアは1人外に出ていた。

ソニア

「もう、みんなは・・・」

赤面するソニアの脳裏に、ハヤテの顔が浮かぶ。

ソニア

「私は誘拐犯から助けてくれたハヤテ君に一目惚れした・・・それは事実・・・でも今回は運良く2人でデートできたから良かったけど、また2人きりになれる機会なんてあるかしら・・・ハア・・・」

「ため息ばかりついていると、幸せが逃げるぞ?」

ソニア

「?」

ソニアが振り向くと、後ろにリインが現れた。

ソニア

「し、神父さん!まだ成仏してなかったんですか!?」

リイン・レジオスター

「失礼だが、私はもう亡霊ではない。伊澄君の力で新たな肉体を与えてもらったんだ。」

ソニア

「そうなんですか。」

リイン

「ところで、ソニア君。君はあの執事君の事が好きなんだろう?」

ソニア

「ええ、自覚はしてます。」

リイン

「ならば、自分の気持ちに正直になれ。彼にアタックすれば良いん

だ。」

ソニア

「ありがとうございます。私、頑張ってみます・・・」

リイン

「ウム、頑張れ少女!!」

ソニアはハヤテに気持ちを伝えようと決意した。

しかしなかなか2人きりになれるチャンスに恵まれなかったのである。

そうこうしている内にあっという間に2年の年月が過ぎ、ハヤテ達は白皇学院を卒業した。

そして、時は流れる。

フォルテシア・ニース

「では、後は若い者達に任せましょう。」

クラウド

「そうですね。綾崎よ、三千院家の執事長として必ずこの見合いを成功させてくれたまえ。」

ハヤテ

「わかりました、クラウドさん。」

フォルテシア

「ではごゆっくり。」

クラウドとフォルテシアは、その場を後にした。

ソニア

「ハヤテ君、執事長になったんですね。」

ソニアはそう言うと、ハヤテの隣に行く。

21歳になったハヤテは、三千院家の執事長になっていた。

女顔なのは相変わらずだが、たくましい体型に育っている。

ハヤテ

「ソニアさんこそ、教会のシスター頭になったそうじゃないですか？」

24歳になったソニアは、アレキサンマルコ教会のシスター頭になっていた。

ショートボブだった薄紫色の髪は腰のところまで伸び、雪路にも劣らないセクシーな体型。

5年の歳月は、ハヤテとソニアを肉体的にも精神的にも大人に成長させていた。

ハヤテ

「ボクは執事長として、新人執事等の育成に務めてるんですよ。クラウスさんにはしょっちゅう見合いを勧められてるんですけどね。」

ソニア

「私もシスター頭として、新人の育成に力を入れてますよ。フォルテシアとしては、早く嫁入りしてほしいみたいですけどね。」

ハヤテ

「5年って長いようであつという間ですよ。お嬢様やマリアさん達もほとんどが結婚してますし。」

ソニア

「そうですね。私の教会でも先輩方のほとんどが既に嫁入りしてますから。」

ハヤテ

「ソニアさん、少し外に出てみませんか？」

ソニア

「外にですか？」

ハヤテ

「ええ、新鮮な空気を吸いながらお話ししようよ。」

ソニア

「そうですね。」

ハヤテとソニアは、外に出た。

ハヤテ

「ソニアさん、ここ5年で随分容姿が変わりましたよね。」

ソニア

「そうですか？」

ハヤテ

「ええ。髪も伸びてとてもカワイくなりましたよ。」

ソニア

「ほ、ほえ！？あ、ありがとうございます・・・。」

ハヤテの言葉に、ソニアは赤面した。

ソニア

「ハヤテ君も女顔なのは相変わらずですが、たくましい体型になりましたよね。」

ハヤテ

「毎日鍛えてますから。」

ハヤテの笑顔に、ソニアは再び頬を染める。

ソニア

「（ああ・・・私やっぱり、ハヤテ君の事が好きなんだわ・・・）
あ、あの、ハヤテ君・・・。」

ハヤテ

「はい、何ですか？」

ソニア

「来週の日曜日、予定とかありますか？」

ハヤテ

「いえ、ありませんけど・・・？」

ソニア

「だったら、来週の日曜日・・・私と2人きりで過ごしませんか？」

ハヤテ

「デートのお誘いですか？」

ソニア

「ほえ！？ま、まあ似たようなものです・・・」

ハヤテ

「良いですよ　ただし・・・」

ソニア

「何ですか？」

ハヤテ

「その日の夕食は、ボクが指定したレストランで一緒にしてほしいんですが、よろしいですか？」

ソニア

「かまいませんよ。」

ハヤテ

「じゃあ、来週はよろしくお願いしますね。」

ソニア

「はい！」

ハヤテとソニアは料亭に戻るとクラウド達に来週の事を説明し、お見合いは終了した。

ハヤテ

「ではソニアさん、また来週。」

ソニア

「はい、よろしく願いしますね。」

ハヤテとクラウドは帰って行く。

ソニア

「（やったあ！ついにハヤテ君をデートに誘えたわ！来週こそハヤテ君に告白しなきゃ！！それにしてもハヤテ君、夕食はレストランでって言っていましたけど、なぜなのでしょうか・・・？）」

ソニアは物思いにふけりながら、フォルテシアと一緒に帰って行った。

そんな彼女達を、怪しげに監視する3人組がいた。

「やっと見つけたぜ、シスター・ソニア・・・」

「オレ達を地獄のどん底に突き落とした代償は高くつくぞ・・・」

「覚悟しておけよ、小娘め・・・」

3人組は不敵に笑うと、暗闇の中に消えて行った。

果たしてこの3人組は何者なのか？

ソニアの命運は！？

そして、ハヤテとソニアの恋の行方は・・・？

第10話：ソニア・シャフルナーズ編／シスターと執事の恋物語『後編』

ソニアがハヤテとデートの約束をしてから1週間後・・・

ソニアは教会から出ようとしていた。

彼女はハヤテとのデートのためにめかし込んでいる。

ソニア

「フウ・・・こんな格好で良いよね。早く行こう・・・」

ソニアが教会から出ようとすると、シンディ達が入って来た。

シンディ

「ヤッホー、ソニアちゃん！」

ニア

「久しぶりね。」

ソニア

「み、みんな！・・・どうしてここに！？」

ラナ

「みんなちょうど仕事が休みで、空港で待ち合わせて教会に戻って来たんです。」

ソニア

「そ、そうなの・・・」

ネイル

「それよりソニアちゃん、そんなにめかし込んでどこに行くの？」

ソニア

「ハ、ハヤテ君とデートに……こないだお見合いして、その後デートの約束したの……」

ニア

「おおー!!」

ラナ

「ついにソニアさんも身を固める決意をしたんですねー!!」

ソニア

「え、ええまあ……じゃあ、私は出かけますので……」

ニア

「ちょい待ち！」

ピタッ！

ソニア

「な、何ですか？」

ニア

「あなたまさか、その格好でデートに行くつもり？」

ニアはソニアの服装を指摘する。

ソニアの服装は、水色のＴシャツにピンクのロングスカートという

ものだった。

ソニア

「え、ええ・・・別に良いじゃない！多少控えめにした方が・・・」

ラナ

「ダメですよおソニアさん！男を誘惑するならもう少しハメを外した方が良いでしょう！！」

ソニア

「私・・・無理に誘惑するつもりなんてないし・・・」

ニア

「このままじゃ埒があかないわね。こうなったらやるわよ！ネイル、シンディー！！」

ソニア

「え・・・？」

ネイル

「お約束の・・・」

シンディ

「ソニアちゃんのお着替えタイム」

シンディ達4人が、一斉にソニアへと飛びかかる。

ババッ！！

ソニア

「み、みんな止め・・・キャーッ!!!」

アレキサンマルコ教会に、ソニアの悲鳴が響き渡った・・・

ハヤテはある遊園地の前で、ソニアの事を待っていた。

ハヤテ

「ソニアさん、遅いなあ・・・」

ハヤテは腕時計を見つめている。

すると、ソニアの声が聞こえてきた。

「ハヤテくん。」

ハヤテ

「あ、ソニアさんの声。」

ソニアが走って来る。

タタタ・・・

ハヤテ

「ソニアさん、待ってましたよ・・・って、え!？」

ハヤテはソニアの格好を見て驚く。

ソニアは水色のノースリーブとピンクのミニスカートを着ていた。

髪型はポニーテールにしている。

ハヤテ

「ソニアさん、その格好は一体・・・？」

ソニア

「出かけようとしたら仲間のシスター達に捕まってしまいまして・・・こんな派手な格好に・・・」

ハヤテ

「ボクも似たようなものですよ。お嬢様とマリアさんに服を着せられて・・・」

ソニア

「お互い大変ですね。」

ハヤテ

「全くだす。では、そろそろ中に入りましょうか？」

ソニア

「ハヤテ君、エスコートお願いしますね。」

ハヤテ

「はい」

ハヤテとソニアは、遊園地の中へと入って行った。

ハヤテ

「あれ？おかしいなあ・・・」

ソニア

「どうしました？」

ハヤテ

「この遊園地は以前お嬢様達と来た事があるのですが、その時は混んでたんですよ。そもそもこの遊園地、普段はもっと混むハズなんですが・・・」

ソニア

「そういえばそうですね。なぜなのでしょう？」

ハヤテとソニアは、遊園地がガラガラな事に疑問を抱いている。

その答えは単純明快だった。

ソニアの仲間であるシスター達が、ハヤテとソニアのために遊園地を貸切にしたからである。

そのシスター達は、離れた所からハヤテとソニアを見ていた。

シンディ

「来た来た！ソニアちゃんとウワサの執事君よ！」

ラナ

「見た感じ、女顔の男の子ですね・・・」

ネイル

「で？あの2人を尾行するのよね？」

ニア

「当然！ソニアちゃんを幸せにできるかどうか確かめさせてもらうわよ……」

シンディ・ニア・ラナ・ネイル

「フッフッフ……」

シンディ達是不敵に笑っている。

ゾクッ！！

ハヤテ

「どうしました、ソニアさん？」

ソニア

「いえ……ちょっと寒気が……」

ハヤテ

「？」

ソニア

「まずどこに行きますか？」

ハヤテ

「オバケ屋敷は……ダメですか？」

ソニア

「怖いですが、ハヤテ君と一緒になら……」

ハヤテ

「じゃあ、行きますか？」

ソニア

「あ、はい！」

ハヤテはソニアの手を握り、オバケ屋敷へと向かう。

ネイル

「ソニアちゃん達、入ったわね。」

シンディ

「頼むわよ、シュヴァング姉妹！！」

ニア・ラナ

「はーい」

ニアとラナの2人も、オバケ屋敷へと入って行った。

ただし、裏口から・・・

オバケ屋敷内部

ハヤテとソニアは、オバケ屋敷内部を進んでいた。

ソニアはハヤテにしがみついている。

ソニア

「ふ、雰囲気ありますよねハヤテ君……」

ハヤテ

「まあそうですね……」

他愛ない会話をしながら進む2人。

すると、突然人魂が飛び出してきた。

実際には作り物なのであるが。

バアン！

ソニア

「きゃーッ！！」

ソニアはハヤテに抱きついた。

ハヤテ

「ソニアさん大丈夫ですか？」

ソニア

「ダメです……やっぱり私、オバケ屋敷は怖い……」

ソニアは震えている。

ハヤテ

「ソニアさん……大丈夫ですよ、ボクが必ずあなたを守りますか

ら。」

ハヤテは満面の笑みを見せる。

ソニア

「は．．．はいです．．．」

ソニアはそれに赤面した。

ハヤテ

「ソニアさん、ボクの背中に。」

ソニア

「は、はい！」

ソニアはハヤテの背中に乗る。

ハヤテ

「しっかり掴まってください．．．疾風の如く！」

ドン！！

ハヤテは疾風の如くで、オバケ屋敷を一気に突き進んで行く。

タッタッタツ．．．

ソニア

「ハヤテ君．．．（ハヤテ君の背中、暖かいです．．．）」

ソニアはハヤテの背中の中の温もりを感じていた。

途中で幽霊やガイコツに出くわしたが、ハヤテは構わず突き進んだ。

その中身が、シュヴァング姉妹だとも気づかずに・・・

ニア

「ウフフ、2人共ラブラブね。」

ラナ

「そうですね、ニアお姉。」

ニアとラナは、2人のラブラブぶりを見てニヤケていた。

ソニア

「そろそろおながが空いてきましたね・・・」

ハヤテ

「ですね、どこかで食べましょうか。」

ソニア

「あ！あそこなんてどうですか？」

ソニアが指差したのは、カレー屋である。

ハヤテ

「良いですね！」

ハヤテとソニアは、カレー屋へと入って行った。

ハヤテとソニアは、カレー屋にいた。

2人はそれぞれ違うカレーを食べている。

ソニアはカツカレー、ハヤテは野菜カレーだ。

ソニア

「おいしいですね、ここのカレー！」

ハヤテ

「そうですね。」

ソニア

「ハヤテ君の食べてるカレーもおいしそうだなあ・・・」

ハヤテ

「ソニアさんも食べます？」

ソニア

「は、はい！」

ハヤテ

「じゃあ、はい」

ハヤテはカレーの入ったスプーンを差し出す。

スッ！

ソニア

「え？これ、ハヤテ君が使ってるスプーンでは・・・」

ハヤテ

「そうですよ？ボクが食べさせてあげますから」

ソニア

「ええ〜！！（こ、これって俗に言う間接キスじゃないですか〜！！）」

ハヤテ

「はい」

ハヤテはスプーンをソニアに近づける。

ソニア

「う・・・」

ソニアはしばらく黙っていたが、意を決して口を開けた。

ソニア

「あ、あ〜ん・・・」

すかさずハヤテがカレーを口に入れる。

パクッ！

モグモグ・・・

ゴクン！

ハヤテ

「どうですか？」

ソニア

「おいしいです！野菜の甘みがカレーの辛さを引き立てて、とても美味だわ！」

ハヤテ

「そうですか、喜んでもらえて良かったです」

ハヤテの笑顔に、ソニアはまたも頬を赤く染めた。

30分後、昼食を食べ終わったハヤテとソニアは会計を済ませ店を後にする。

その光景を、ネイルがしっかり見ていた。

ネイル

「フフッ、やっぱりラブラブね。」

ネイルは会計を済ませると、シンディ達の元へと向かった。

ニア

「今日1日2人の行動を見てきたけど・・・」

ラナ

「結構良い感じでしたね。」

ネイル

「で、どうするシンディ。これで終わりにする?」

シンディ

「イヤ。まだ1つ残ってるわ。肝心な事がね・・・」

ネイル・ニア

「ま、まさかシンディ・・・」

シンディ

「ウフフ」

ハヤテとソニアは、遊園地内のベンチでくつろいでいた。

ハヤテ

「そういえば、ここってとてもおいしいアイスクリームがあるんですよ。買って来ましょうか?」

ソニア

「ありがとうございます!味はハヤテ君に任せますね。」

ハヤテ

「では、すぐそこなので。」

ハヤテは店へと走って行く。

ソニアはベンチでくつろいでいる。

すると3分後、不良風の4人組が現れた。

もちろんこの4人組、中身はシンディ達である。

「よお姉ちゃん、こんな所で1人何やってんだ？」

「ヒマならオレ達と遊ぼうぜ？」

「（良いんですかね、こんな事して・・・）」

シンディ達はぎこちない男言葉を使う。

ソニア

「申し訳ありませんが私、連れがいるので。ナンパするなら他の方
にしてくださいます？」

ソニアは軽くあしらおうとしたが、シンディ達がソニアに迫って来
た。

「まあまあそつつれない事言わずにさあ。」

ネイルがソニアの腕を掴む。

ガシッ！

ソニア

「ちょっ、止め・・・」

「その人から離れて下さい。」

ソニア達が振り向くと、そこにはアイスを買って来たハヤテがいた。

「あんだあ、オマエは？」

「女のクセにオレ達に楯突くんじゃ・・・」

ハヤテ

「その人から離れる。でないとオマエ達の腕使い物にならなくなるぞ？」

ハヤテはドスの利いた声で話す。

さすがに腕を使い物にならなくされるのはヤバイ。

シンディ達は少し悲鳴を上げてから逃げに行った。

タタタタ・・・

ハヤテ

「もう大丈夫ですよ、ソニアさん。」

ソニア

「ハヤテ君・・・」

ソニアはハヤテに抱きつく。

ソニア

「今のハヤテ君少し怖かったけど、頼もしかったです・・・」

ハヤテ

「ゴメンナサイ、ソニアさんを守るのに必死で・・・」

ソニア

「良いんですよ、私は・・・」

ハヤテとソニアはその後デートを満喫した。

ソニア

「ハヤテ君、今日は1日ありがとうございました。」

ハヤテ

「ボクも楽しめましたよ。では、後はレストランで夜の食事ですね。これが住所です。」

ハヤテはソニアに紙を手渡す。

ハヤテ

「では、ボクはこれで。」

ハヤテは帰って行く。

ソニア

「さてと・・・出て来なさい、シンディ達!!」

ソニアが叫ぶと、近くの茂みからシンディ達が出て来た。

ガサッ!

シンディ

「アハハ、やっぱりバレてたか。」

ソニア

「バレるわよ。あんな片言の男言葉で気づかないとでも思ったの？
後、今日1日私達を尾行してたでしょ。」

ネイル

「それもバレてたか。さすがはソニアちゃんね。」

ソニア

「全く。」

ラナ

「でもソニアさん、楽しんでましたね。」

ニア

「あんなに楽しそうな顔したソニアちゃん初めてよ。で、この後は
食事しに行くんでしょ?」

ソニア

「ええ。シスター服でも着て行こうと思ってます。」

ネイル

「ダメよそんなの！フォルテシアがちゃんとドレス買ってくれてるから、それ着て行きなさい！」

ソニア

「わかりましたよ・・・」

ソニアが返事したその時、彼女の携帯が鳴った。

ピピピ、ピピピ！

ソニア

「あら、メール？・・・！！」

メールを見たソニアは、顔が真っ青になった。

ニア

「ど、どうしたのソニアちゃん？」

ソニア

「フォルテシアが・・・さらわれました・・・」

ネイル

「ええ！？」

シンディ達はソニアの携帯を見る。

そこには縛られたフォルテシアの写真を送付したメールがあった。

『オマエの育ての親、フォルテシアを誘拐した。助けなければ北練馬の廃倉庫に1人で来い。』

ラナ

「これって脅迫じゃないですか!!」

ニア

「ダメよソニアちゃん、行っちゃ!!」

ソニア

「そんな事言っても、フォルテシアは私の大切な家族です!放っておけません!みんなは一応教会に行って下さい!!」

ソニアはそう言うが早いか、駆け出して行った。

アレキサンマルコ教会

30分後、シンディ達は教会に戻っていた。

シンディ

「フォルテシア!!」

シンディ達はフォルテシアの部屋のドアを開け、中に入る。

するとそこには、フォルテシアがイスに座って紅茶を飲んでいた。

ネイル

「フォルテシア!!」

ラナ

「誘拐されたんじゃないんですか!？」

フォルテシア

「私が誘拐? 何言ってるんですか・・・今日は私、1度も外出してませんよ?」

ニア

「た、大変・・・」

シンディ

「ソニアちゃんが危ない!!」

北練馬廃倉庫

ソニアは北練馬の廃倉庫に来ていた。

ガラガラ・・・

ソニアはガレージを開け、中に入る。

ソニア

「フォルテシア!!」

そこにはフォルテシアがいた。

ソニアはフォルテシアに近づく。

ソニア

「フォルテシア？」

ソニアがフォルテシアの肩に触れると、フォルテシアの首が地面に落ちた。

ポトッ！

ソニア

「キャアアア、フォルテシア！！ん？」

ソニアがのぞき込むと、そのフォルテシアは人形だった。

ソニア

「に、人形！？まさかこれは・・・」

畏だと気づいたその瞬間、ソニアは背後から何者かに羽交い締めにされた。

ガシッ！

ソニア

「キャッ！！は、離して！！」

ソニアは暴れる。

影はソニアの口をハンカチで塞いだ。

ガバッ！！

ソニア

「うっ！！うゝ、うゝ！！」

ソニアはジタバタともがいたが、やがて目がトロロンとなっていく。

ソニア

「うう・・・」

ソニアは気を失い、倒れ込んだ。

ドサッ！

ソニア

「ん・・・」

ソニアはうつすらと目を開ける。

ソニア

「し、縛られてる！？」

ソニアは体と手足をロープでグルグル巻きに縛られていた。

ソニア

「うゝ、うゝ!!」

ソニアはジタバタともがいたが、ロープはビクともしない。

ソニア

「うう・・・ほどけない・・・」

ソニアが俯いていると、奥のドアが開いて3人組が入って来た。

「おっと、目を覚ましたみたいだぜ。」

「久しぶりだな、シスター・ソニア。」

ソニア

「あなた達、誰です？」

「もう忘れたか、この覆面を！」

3人はそれぞれ覆面を取り出した。

ソニア

「その覆面・・・あ、思い出しました！あなた達は確か・・・」

「フフフ・・・」

ソニア

「デニーズ・フロート!!」

ズルッ！

3人はコケた。

「違うわ！オレ達はファミレスの飲み物か！！」

「デニーズ・フリートだ、デニーズ・フリート！！」

ソニア

「ああ・・・確か前に私が雇ったテロリストの3人組でしたっけ？」

「ようやく思い出したか？」

ソニア

「それよりも、どうして偽装写真まで送りつけて私を誘い出したんです？」

「オレ達はあの日、三千院家の執事や令嬢共を暗殺すべく船に乗った。アッサリ倒されちゃったがな。」

「おかげでオレ達は刑務所暮らしだ。オレ達はオマエを恨んでる。」

「オレ達は脱獄した後、オマエを探していたのさ。恨みを晴らすために。フォルテシアの写真は偶然見つけた時に撮って、合成である写真を作った。」

ソニア

「あなた達も懲りない人達ですね。聞くところによると、白皇にも侵入してハヤテ君に倒されたらしいじゃないですか。」

「ああ・・・だからオレ達はあの執事にも恨みがある。オマエを人質にして、あの執事を呼び出して痛めつけてやるのさ。」

「さて、作戦会議だ。オマエ、余計な事は考えるなよ?」

3人組はそう言つと、ドアの奥へと消えて行つた。

ソニア

「ヤバイですね、これは・・・とにかく、ハヤテ君に連絡しないと・・・」

ソニアは辺りを見回す。

すると、ソニアのバッグがあつた。

ソニア

「あつた、私のバッグ!」

ソニアはゆつくりとバッグまで這つて行く。

ソニアは後ろ手でバッグから携帯電話を取り出した。

三千院家

ハヤテは自分の部屋で、レストランに行く準備をしている。

すると、突然ハヤテの携帯電話が鳴った。

ピピピ、ピピピ―

ハヤテ

「ソニアさんからだ・・・どうしたんです、ソニアさん?」

ソニア

「ハヤテ君・・・私今、かつてあなた達を狙ったテロリスト達に捕まってるんです・・・」

ハヤテ

「ええ!!それでソニアさん、無事なんですか!？」

ソニア

「ええ、何とか・・・手足と体をロープで縛られてますけど・・・」

ハヤテ

「ソニアさん今、どこにいるんです?」

ソニア

「北練馬の廃倉庫です。あ・・・」

ハヤテ

「ソニアさん、どうしました?」

ソニア

「キャアアア!―!」

ハヤテ

「ソ、ソニアさん!？」

「チッ、やはり執事に連絡してやがったか。」

「油断も隙もない小娘だぜ。」

ハヤテ

「オマエ達、あの時のテロリストだな？」

「よう、三千院家の執事。オマエに会ったのはあの劇以来だな。」

ハヤテ

「そんな事はどうでも良い!ソニアさんは無事なのか!？」

「ああ、無事さ。ちょうど三千院家に連絡しようと思っていたが手間が省けた。この小娘を助けたければ、オマエ1人で北練馬の廃倉庫に来い。」

ハヤテ

「ソニアさんには手を出すな。」

「心しておくよ、じゃあな。」

電話が切られる。

ピッ!

「さてと・・・コイツの口は塞いどくか。」

リーダーの男はガムテープを取り出すと、ソニアに近づいた。

ソニア

「!?!」

ビーツ!

ソニア

「や・・・ムウゝ!!」

ペタッ!

ソニアは口にガムテープを貼られ、口を塞がれた。

ソニア

「んゝ、んゝ!!」

「さてと、後5分もすりゃ執事がここにやって来るな。」

「アイツが来たら、オマエ共々ボロボロにしてやるぜ。」

ソニア

「んっ、んんっ・・・」

ソニアは震えている。

「しかし、この小娘なかなかスタイル良いよなあ。」

「あの執事が来るまでヒマだし、ちょっと楽しませてもらうかな。」

ソニア

「!!」

男の1人はナイフを取り出すと、ソニアに近づいていく。

ザッザッ・・・

ソニア

「んっ、んんっ・・・（イ、イヤ・・・助けて、ハヤテ君・・・）」

ソニアは泣きそうになる。

ソニア

「んんっ！！！！（ハヤテ君っ！！！！）」

ソニアが叫んだその時、ガレージがガラガラと開いた。

ガラガラ・・・

ハヤテ

「ソニアさん!!」

「来たか、綾崎ハヤテ・・・」

ソニア

「んっ、んんっ・・・（ハ、ハヤテ君・・・）」

ソニアは瞳を潤ませている。

ハヤテ

「よくもソニアさんを泣かせましたね・・・許しませんよ!!」

ハヤテは疾風の如くで突っ込むと、あっという間に2人を倒した。

ドゴォ!!

「それ以上動くな、綾崎ハヤテ!動いたらこの小娘の命は・・・」

リーダー格の男はソニアにナイフを突きつけようとしたが、それよりも速くハヤテが突っ込んだ。

ザッ!

「え・・・」

ハヤテ

「遅いんだよ!!」

ハヤテは回し蹴りでリーダー格の男を吹っ飛ばす。

ドゴォ!!

男は壁に激突し、気絶した。

ハヤテ

「ソニアさん!!大丈夫ですか?」

ハヤテはソニアに駆け寄り、彼女の口に貼られたガムテープをはがす。

ピリリ・・・

ソニア

「イタタ・・・ええ、大丈夫ですよ・・・」

ハヤテ

「今、ほどいてあげますから・・・」

ハヤテはソニアの背後に回ると、彼女の拘束を解いた。

その後ハヤテが呼んだ警察が到着し、デニーズ・フリートの3人組は誘拐と殺人未遂の容疑で連行されて行った。

ハヤテとソニアは、レストランで食事をしていた。

ハヤテは執事服、ソニアは紫色のドレスを着ている。

ハヤテ

「今日は災難でしたね、ソニアさん。」

ソニア

「ええ、怖かったです。でも私、ハヤテ君が必ず助けに来てくれると信じてました。」

ハヤテ

「ソニアさん、ボクはあの時必死でした。あなたを失いたくない一心だったんです。これがその気持ちです。」

ハヤテは小さな箱をソニアに手渡す。

スッ！

ソニアが箱を開けると、中には指輪が入っていた。

ソニア

「これは・・・結婚指輪？」

ハヤテ

「そうです。ソニア・シャフルナースさん・・・ボクと結婚していただませんか？」

ソニア

「は、はい！喜んで・・・！！」

ソニアはハヤテの方へ行くと、彼に抱きついた。

1ヶ月後、ハヤテとソニアはアレキサンマルコ教会で結婚式を挙げた。

フォルテシアやシスター達に祝福されて。

電車の中で出会った2人。

この出会いは、運命だったのだろう。

綾崎ハヤテとソニア・シャフルナース・・・

2人の未来に、幸あれ。

ソニア・シャフルナース編：完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8974d/>

ハヤテのごとく！短編集～ヒロインは変わる、時のように～つながりを持たな

2010年10月9日00時50分発行